－文 芸－

草の丘

第 12 号

2017 年 6 月 印旛文学の会

URL http://bungeikusano-oka.raindrop.jp/

文芸

草の丘 第十二号（二〇一七年六月）

目次　草の丘 第十二号

《詩》
意地・未到の課題　中川とら……一
《連載小説》
ラン博士の館（第三話）　唐瀬 光……三
そよのバアバの空中サロン（その三）　中川とら……一七
《エッセイ》
自由とストレス　畑中康郎……二三
《連載小説》
宿場町と共に消ゆ　香取 淳……二七
《短編》
信　忠　畑中康郎……四四
《カット》
高橋より

意地

中川とら

気に障ったら ごめんなさい
話のあとに
あなたは必ずそう付けたし
意地悪く　うす笑いする

すでに、わたしの心は通り雨の後で
びしょ濡れになっている

今度こそ、今度こそ
やり返すぞ と　覚悟するのだが

我に帰ると後のまつり、雨はやんでいるのだ
しかし
このまま終わることはないよ
意気地なしにも
少々の意地というものが あるからね
その時は　必ずやってきます

未到の課題

歩いても　歩いても
たどりつけない場所

さがしても さがしても
見つけることができない何か

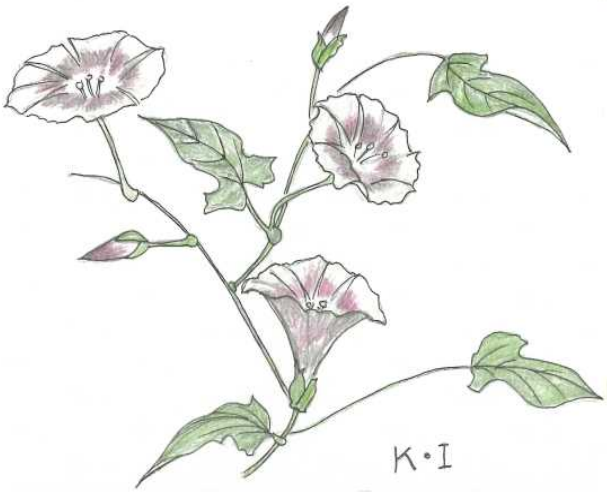
どんなに目をこらしても
見えない実体

努力しても　努力しても　いまだ
つかみ取れない目標

かぞえきれない未到の課題が
まだ

私の魂をゆさぶりつづけ
休ませてくれない

◇



ラン博士の館（第三話：夜の西洋館）

唐瀬　光

プロローグ

東京のはずれ高尾山の麓に、広大な山林を有する女子学園がある。敷地の周囲は高さ七メートルもあろうかと思われる頑丈な塀が囲み、外部から男たちが侵入するのを厳しく拒んでいる。学園内には校舎や体育館などのほかに、生徒全員が寝泊まりする寮棟が並んでいる。

ここ、舞鶴（まいづる）女学園（通称、鶴女（つるじょ））は中学生と高校生が学ぶ全寮制女学園。生徒たちに男子がいないのはもちろんのこと、学園で働く先生や事務員、警備員に至るまで皆女性。

ここは男を排除した女だけの社会だ。入学式や卒業式などの行事を除き、学舎内に男性が立ち入ることはできない。

この学園に無理やり入学させられたぼく（立花芯（たちばなしん）・通称『シン』）は、性別として、一応、女性に分類される。『一応』と言ったのは、身体は女性だが、脳の構造は男。自分の性認識も男性のそれだから、当然、考え方、感じ方が、男子生徒と同じ。自分のことを『オレ』または『ボク』と

言い、相手を『キミ』、『オマエ』と呼ぶ。女性特有の集団行動はしないし、彼女らに交じって『わ―っ』、『きゃー』と、はしゃぐこともない。

これまで遊び仲間も男子ばかりだったから、女の社会には全く縁がなかった。ところが、ここは生徒も先生も女性だけ。最初はとてもついていけないだろうという悲壮感を持っていたが、いざ入学してみると、けっこううまくやっている。

この女ばかりの社会にも、男性的なものを求める風潮があって、ぼくなど、この学園に十数人いる男脳を持つ生徒は、いつもまわりを女の子たちに囲まれている。パンダ並みの珍獣に見立てられているのかも知れないが、人気者扱いされているのは間違いない。ここでは肉体と脳の性自認が違っている者でも『変態』などと陰口をたたかれ、排除されることはない。

それに、この学園には世の常識とはかなり異なる習慣がある。それは女の子同士がパートナーとなる婚姻（聖なる結婚という意味で『聖婚（せいこん）』という）がある。俗世間ではこれをレズビアンとかなんとか言って、好奇の目を向ける。

だが、この『聖婚』は、それとは、ちょっと……いや、かなり違って、お互いの魂と魂を結ぶ、とても神聖なものなのだ。

かく言うぼくも、梅雨の終わり六月の末に、一学年上の健康美人、伊東葵（いとうあおい）さん（生徒会書記：柔道部と園芸部に所属）と聖婚し、『夫婦』の間柄になった。

夏休みは、ぼくが盲腸の手術をしたせいで病院暮らしになったが、葵さんの献身的な介護を受け、わずか一週間で退院。二学期が始まる九月の始めには、もう完全に元の身体に戻っていた。

そこで、休み中にできなかった課題。学園の敷地に隣接する幽霊屋敷（いまは廃屋となっているレンガ造りの西洋館）を探索して、毎晩ルームメイトのお雪（ゆき）（尾鈴美雪（おすずみゆき）・一年生）から聞かされる、夜な夜な現れるという『幽霊』たちの正体を突き止めようと思う。

夜の西洋館

1

二学期が始まった最初の夜、ぼくら三人は連れ立って、学園の西に広がる森の中を歩いていた。
「なんで、オマエが来るんだよぅ？」
ぼくは、すぐ後ろを歩いている小柄なツインテールの子に、トゲのある声で突き離すように言う。わざと葵さんの手を取り、見せつけるようにいちゃついてみる。
だが、その子はめげずについて来る。いや、好奇心がまさって、ぼくら『夫婦』のことなど眼中にないのかも知れない。
今宵、十時がまわった頃、森に出かけようとして、ルームメイトのお雪に「懐中電灯を貸してくれ」と言ったら「どこに行くの？　誰と行くの？」とうるさいのなんの。
「えーっ、葵様とデート？　こんな夜更けに？」
「なにも変なことないだろう。葵さんとオレは聖婚して、今は『夫婦の仲』なんだから」
わざと『夫婦』を強調してみたが、彼女は丸い顔を傾けて不審そうな表情を見せる。そしてポン！　と手を打つと、
「わかった！」と叫んだ。
「あそこでしょう。あの館」
なんて鋭いやつだ。『違う』とも言えないから黙っている。
「ねえ、あたしも連れて行って。お願い。ねえ～」
しつこいのなんの。最後には「連れて行きゃなきゃ懐中電灯は貸さない」とまで言った。
あまりにうるさいので「葵さんがオーケーするなら」という条件で連れて来たのだが、当の葵さんは、すんなり「いいわ」と言ってしまった。
しかたがない。幽霊屋敷の探索にはコブつきで出かけることにしよう。

学園の西に広がる深い森。その曲がりくねった暗い夜道を細いライトの明かりで照らしながら、縦一列になって歩く。
先頭は園芸部所属でこの森を知り尽くしている葵さん。

次にぼくが続き、最後にお雪がツインテールの髪を揺らしながらトコトコついて来る。
高尾山から涼しい風が下りて来るとはいえ、真夏が過ぎたばかりの森には、やぶ蚊が繁殖し、通る者があればこれ幸いにと寄って来る。
その対策に、ぼくらは虫除けの薬を顔や首に塗り、園芸部から借りた作業着をまとっていた。
額まで隠れるキャップ帽に、首までおおうカーキ色の長袖シャツ。腰から下は厚手の作業ズボン。手には白いメリヤス地の軍手。足には木登り用の地下足袋を履き、腰にハサミやロープの入ったウエストバッグをつけている。これじゃ、どう見ても工事現場の作業員だ。
ぼくもお雪も、そんな格好はダサイから嫌だと言ったが、葵さんが「自然をナメちゃだめ」と聞き入れない。
そういう訳で、作業着姿の乙女が三人、真っ暗な森の細道を、懐中電灯の明かりだけを頼りに、奥へ奥へと進んで行く。
知らない者には、学園のメンテナンス要員が、設備かなにかの点検に向かっているとしか思えないだろう。

この森も含めて学園の敷地は背丈の三倍もある高いコンクリートの塀に囲まれており、その上端には鉄の忍び返しが埋められ、赤外線探査装置も張りめぐらせてある。
まさに刑務所もかくやと思われるような、寸分の隙もないセキュリティー。この壁を越えて来る外部からの侵入者はまずいない。だから、この真夜中に、校舎から離れた森の中でも安心して出歩けるのだ。
しばらく行くと古い西洋庭園に出る。あまりに広いので手入れが行き届かず、昔は奇麗な幾何学模様をしていただろう憩いの園が、今や草木の茂る廃園と化している。
その曲がりくねった道を、崩れたレンガ塀や奇妙にねじれた木の枝などを避けながら黙々と歩く。
やがて学園を取り巻くコンクリートの長い塀に突き当たった。それに沿って森の方に続いている砂利道を、夜な夜な幽霊の出るという西洋館の方に向かう。幽霊たちに見つからないように電灯の明かりを消す。
夜空には、そんな人間どもの思惑をあざ笑うように、下弦の月が赤く輝き、わずかな光りを地上に落して、我々の

歩く雑草の生えた砂利道を照らしている。

2

前方の夜空、塀の上に頭の尖った黒い影が、くっきりと浮き上がって来た。これがめざす館の塔だ。だが、まだ時間が早いのか、窓に明かりは見えない。

ぼくらは葵さんを先頭に、足音を立てないよう、注意深く歩いて行く。砂利道というのは普通の靴で歩くと、踏むたびにジャラジャラとうるさい音がするものだが、今履いているのは庭師の好む地下足袋。これだと靴底が地面にぴったりと張り付き、忍者が歩くように、少しの音も立てない。

やがて廃園が終わり、再び森との境に入る。砂利道を少し歩き、館のある辺りで、道の脇に立っている大きなカシの木に上る。ぼくと葵さんはなんなく上がり、地面から六メートル程の高さに生えている太い横枝の上に立つ。だが腕力のないお雪は、ここまで上がれない。ちょこんと幹の根元にしがみついているだけだ。

そこで葵さんがウエストバッグを開いて、ロープの束を取り出す。片方の端を横枝に結びつけ、もう片方をお雪のいる地面に下ろして「結び目のコブに足をかけて、ゆっくり上っておいで」と小さな声で指示する。

ロープには二十センチ間隔に縄目のコブがつくられ、取りつき易いようになっている。

お雪は下からロープを引っ張って強度を確かめていたが、決心したように両手で強く握ると、片足をコブにかけ、グイと体重を乗せる。

こんな時に地下足袋というのはとても便利がいい。爪先が親指と他の指に分れているので、ロープを足指に挟んで滑らないように上ることができる。

慣れると簡単だが、初心者では、なかなかそうはいかない。それでも小柄で敏捷な彼女は、ゆるゆるとだが、ようやく横枝までたどりつくことができた。

人数が増えたので、ぼくはさらに一段高い枝に上がる。ここからだと、屋敷の丸い塔がよく見える。

だが、崩れかけた塔のガラス窓は真っ暗で、なんの明かりもついていない。しばらくじっと見つめていたが、人の

動く気配はない。
「おい、お雪、誰もいないぞ」
幽霊が出るという情報を、毎夜聞かせてくれたお雪に、とがめるような口調で問いかける。
「だって、あたし、人から聞いただけで、自分で見たわけじゃないもの。何度もそう言ったでしょう」
『乗り気になった、そっちが悪い』とでも言いたげな様子。
「まだ早いのかも知れないよ。もう少し待ってみよう」
葵さんが、ぼくの立っている枝を片手で握りしめ、自分の身体を支えながら言う。
「あまり声を出さないで。館の霊に聞こえるといけないから」
葵さんの指示に、息を殺して待つこと三十分。まるで忍者にでもなったような気持ちだ。そのうち手足がだるくなって来た。もういいかげん木から下りようか、と思ったところで「あっ、なにか聞こえる」と下の枝から、お雪の声がした。
ハッと耳を澄ませば、下草を踏み分けながら、なにかが近づいて来る。懐中電灯らしき一条の細い明かりが点滅しているのも見える。かすかに人の話し声らしきものが風に乗って流れて来る。
ぼくは木の幹に身体をくっつけるようにして、音のする方に目を凝らした。
闇夜に目が慣れているとはいえ、木々の立ち並ぶ森の中、音はすれども相手の姿は見えない。でも話し声や、草を踏み分ける音から一人でないことはわかる。少なくとも二、三人はいるだろう。ここは学園を囲む塀の中だから、歩いているのは生徒か先生か、それとも警備員のオバサンか。
足音はこちらに向かっている。もうすぐぼくらが潜んでいる木の下を通るかも知れない。
（いったい誰が、こんな夜更けに……）
みんな同じ思いだろう。お雪も葵さんも、木の上から息をひそめて見つめている。
（もうすぐ、木の下に来る）
そう思った矢先、近くの藪でガサガサと枝葉のすれ合う音がしたかと思うと、唐突に話し声が消えた。以後、森は静寂に包まれ、人の動く気配はない。
耳を澄ましても聞こえるのは、木立の間をサワサワと風

の流れて行く音だけだ。
「今の、なに？」
お雪のキツネにつままれたような声がした。すぐ葵さんの「しっ！」と唇に指を立てたような声。
「どうやら、霊人たちのお出ましのようよ。もうすぐ塔に動きがあるわ」
その得心したような声から、彼女はなにかをつかんでいる様子。

3

それから十分ほど身を潜めていると、塔の四階、次いで五階の窓がぼうと明るくなった。
先週、夏休みの終わりに、この廃屋に立ち寄って、窓の外から館の中を覗いたが、光熱関係は止められているのか、電気、ガス、水道などは、もう何年も使っていないように思えた。だから、あの灯りは外部から、電池式ライトでも持ち込んだに違いない。
結局、あそこにいるのは単なる人間で、超常現象などではないということ。
（幽霊の正体みたり……云々）
そうだろうとは思っていたが、ガッカリしたのも正直なところ。

苔などが付着して黒く変色したガラス窓。それを通して、人の影らしきものが見え隠れしている。
はっきりとはわからないが、三人ほどが動いている様子。みんな小柄だから、たぶん女性。かすかに風に乗って流れて来る声も高い音。さきほど森の中を歩いて来た連中の声に似ているから、同じ人物なのだろう。どこかに塀の内側から、あの館に通じる抜け道でもあるのだろうか。
とにかく夜な夜な現れるという人型の影が、幽霊でないことは確かなようだ。
（では、なにをしているのか……）
目を皿のようにして見つめるが、この真夜中に、薄汚れた窓ガラスを通して見る影は、ぼんやりとしてよくわからない。ライトは点いているが、室内灯のように明るくないので、彼ら（彼女らか？）の動きがつかめない。

三つの人影が塔の四階と五階を行き来して、ビンか箱のような物を持ち歩いている。
やがて影たちは椅子に座ったのか、動きを止めてなにかをいじくり始めた。

小一時間も木の上にしがみついていると、手足が疲れて、鉛のように重くなる。塔の窓から見え隠れする人影は、立ったり座ったりを繰り返すばかりで、なにをしているのかここからではわからない。本か書類か、そのような角張った物を広げたり、器のような物を持ち歩いたりしている。
影たちの動きから察するに、肝試しとか、雑談とか、そのような遊び事ではなく、真剣に物事に取り組んでいる様子。強いて言えば、極秘になにかを研究しているのではないだろうか。そういう動きに見えなくもない。

進展のないまま、一時間、二時間と、そのままの状態が続いた。下半身にしびれが走り、手足が棒のように硬直する。早く地面に下りて横になりたいが、塔の中にいる人影を見張らなくてはならない。すぐ下の枝にいるお雪は、もう立っていられないとみえ、木の枝をまたいで、背中を太い幹にもたせかけている。
息を殺して、ただひたすら見張る。このつらいこと。これをこなすのを職業としている探偵や昔の忍者は、きっと超人に違いない。
（もう限界だ……）
そう思って木を下りようとした時、急に塔の明かりが消えた。後にはなんの動きも見えず、窓は暗い静寂につつまれている。
「終わったのかなあ？」
声を出すと、葵さんが「しっ！」と、再び唇に指を立てる。しばらくそのままの状態を続けていると、また近くでガタガタ音がする。小さな声がしてゴソゴソと誰かが這い出して来る感じ。やがて草木のすれ合う音が次第に遠くなって、ここからは聞こえなくなった。
ぼくたちは、すぐに木から下りて、草の上に寝そべった。硬直した筋肉が緩んで、とても気持ちがいい。このまま眠ってしまいたかったが、明日の授業を考えると、そうもいかず、ぼくらは重い身体を起こし、森の中を這うように寮

の方に向かった。

4

次の日曜日、ぼくらはまた幽霊館の探索に出た。メンバーはこの前と同じ、ぼくと葵さん、それにルームメイトのお雪。違うところは、今回は夜中でなく、真っ昼間だということ。

葵さんの厳重な口留めで、ぼくら三人が、あの館を調べていることは誰にも話していない。

葵さんは、最初ぼくが幽霊屋敷を調べようと言い出した時には「ふふん」とバカにしたような顔をしたものだが、今ではすっかり乗り気。探偵にでもなったようなつもりで、あれこれ計画を練っている。

今日はまず、校医のいる医務室に寄って、事務員（ボランティアの生徒）に先生やナースの行き先を聞いていた。

ここの外科医、松原先生は学園内にいたが、もう一人の切原浜美女医（通称ハマちゃん）が世田谷の女子大に出かけていると聞いて、得心したような顔をしていた。

ついで生物部の部室を覗き、蘭先輩（七島蘭・ハマ先生の妹）がいないか確認する。なぜそんな人物の確認をするのか、疑問に思って聞いてみたが、彼女は薄ら笑いを浮かべるだけで、なにも教えてくれなかった。

それから、ぼくとお雪をうながして幽霊屋敷の見える森の方に出かける。

今日は日曜日。廃園の小高い丘に建つギリシャ神殿（レプリカ）は相変わらず『聖婚』の行事で賑わっていた。

パルテノン神殿を模したエンタシスの白い柱のまわりには、夏用セーラー服に身を包んだうら若き乙女たちが集まり、建物の中で行われている婚姻の儀式を覗いている。

やがて列が割れて、手をつないだ二人の少女が現れる。彼女たちが通ると、まわりから赤、白、黄色と鮮やかなバラの花びらが、新たに『夫婦』となった二人の頭に振り撒かれる。

彼女たちが出て来た神殿の正面には、今日の儀式を執り

行ったギリシャ風巫子と、赤い袴に千早をまとった和風巫子の三人が並び、彼女たちの後ろ姿を見送っていた。
パートナーになった乙女の二人は、みんなに見送られて丘を下り、キャンプ場に抜ける小道に入って行った。
丘の上の生徒たちは、やがて三々五々雑草の生えた廃園の小道を、校舎の方に向かって静かに去って行く。三人の巫子たちも、ブロンドの髪を風になびかせたギリシャ巫子を真ん中に、静々と丘を下って行く。
日輪はようやく中天にさしかかり、もうすぐ朝の時間が終わろうとしていた。

「さあ、行くわよ！」
葵さんの張り切った声が聞こえた。
彼女にうながされて、ぼくとお雪も森の方に足を向ける。
三人とも、先週と同じ園芸部の倉庫から借りたカーキ色の作業服を着込んでいる。なんだか庭師にでもなったような気分だ。
廃園を抜け、森との境目に来た所で、塀の上に目指す館の塔が顔を出している。銅の板で葺いた屋根は青い錆におわれ、昼間でも近寄りがたい不気味な様相を見せている。
今度は木に登らず、前回真夜中に探索した時に、話し声や、草を掻き分ける音がした方面を丹念に見てまわった。
「見つけた！」
一人離れて藪の中に分け入っていたお雪が、鋭い声を出す。
「どれ、どれ」
ぼくと葵さんが近づいて、彼女の指差す所に目を向ける。
そこには、人の足跡らしきものが、いくつもついていた。その形の違いから、彼ら（彼女か？）は三人……いや、大きいのも、ところどころ交じっているから四人か……が、ほぼ一列に続いている。
足跡は形の崩れた古いものから、はっきりとわかるものまで見られるから、かなり以前より通っていたのだろう。
問題はそれが唐突に消えている場所だ。そこを探すべく、ぼくら三人は葵さんを先頭に、その足跡をたどりながら注意深く進んで行く。
「いい、むやみに歩きまわっちゃダメよ。足跡のついている所をそうっと踏んで行くの。誰かに見つかったと、犯人

たちに悟られないように」
葵さんは名探偵にでもなったつもりか、相手を『犯人』と決めつけ、真剣な目つきでぼくとお雪に指示を出す。それから、二つに分けた長い髪を揺らしながら、足跡をたどって、列の先頭を歩いて行く。
すでについている足跡を踏みながら進むと、ヒイラギナンテンの生い茂る藪に突き当たった。
足跡はそのトゲにおおわれた枝葉の下に消えている。藪の裏側にまわってみたが、そこに足跡は見られなかった。
「ふ～ん」
葵さんはアゴに片手を当てて、足跡の消えたあたりを注視している。
不思議なことに、ヒイラギナンテンの株はその辺りだけ丸くまとまって群生し、ほかの地面には見当たらない。自然に生えたものなら、そこだけでなく、あちこちにポツポツと生えているはずだが。
（まるで、後から誰かが植えたような……）
その葉には鋭いトゲがついている。素手でさわるともちろん痛い。ところが今日は三人とも厚手の軍手をしているので、さほど気にすることもない。
ぼくたちは枝葉を掻き分けながら、株の根元を探した。
「あったぁ！」
お雪が歓喜の声をあげる。
ぼくと葵さんもそばに寄って、彼女の手元を眺める。
するとそこにはコンクリートの厚い板のようなものが見えた。丸い形で中央に取っ手のような金属がついている。
「まるで、マンホールの蓋みたいね」
葵さんも腰をかがめて見入っている。
「見て、この取っ手。つるつるよ」
なるほど、その金属は誰かが始終さわっているように、ピカピカに輝いている。それは鉄ではなく、おそらく青銅。あの館の屋根やドアに使われているものと同じ金属でできているようだ。
葵さんはその取っ手を片手でつかみ、上に引き上げようとするがうまくいかない。今度は両手に持って、腰を入れ「うんしょ！」とかけ声とともに引くが、わずかにずれただけだ。

「シン、手伝って」
葵さんの声にぼくも近づき、二人で取っ手を握りしめて「えいっ！」と力を入れると、ようやく持ち上がった。それを横にずらすと、人ひとりがやっと入れるような丸い穴があった。穴の壁はコンクリートではなく、切石が積み重なってできている。その石に蓋と同じ様な金属の取っ手が埋め込まれ、人が上り下りできるようになっている。
「まるで、井戸みたい……」
お雪が中を覗きながら、感心したようにつぶやく。
穴の中は暗く、葵さんが懐中電灯をバッグから取り出して、光を差し入れると、底が見えた。深さは五メートルといったところか。水は溜まっていないから井戸ではない。
「どこかに横穴があるはずよ。下りてみよう」
そう言うが早いか、葵さんは足を取っ手にかけ、縦穴を下り始める。
「崩れるかもしれないから、気をつけてください」
穴はとても古いものらしく、切石の表面には青い苔が付着している。葵さんは「だいじょうぶ」と言いながら、取っ手をつかんで、ヒョイヒョイと軽く下りる。
彼女が底に立つと、次にお雪、最後にぼくが下りる。
青銅の手すりは、しっかりと切石に埋め込まれ、人の体重がかかっても、ぐらついたりしない。
下りて来た穴に比べ、底は四辺形になっており、しかもかなり広い。ぼくら三人が立っても、じゅうぶん動くことができる。
「穴があるわ」
お雪が壁の一方を指差す。
そこには人がかがんで入れるようなアーチ型の横穴が開いていた。その洞窟のような穴も壁から天井まで切石を積み重ねて造ってある。かなり古いもので、表面には黒みがかった苔がべっとり付着していた。
葵さんは懐中電灯を洞窟の中に差し入れ、ぐるぐるまわしながら奥の方を調べていたが「今日はここまでね」と残念そうにつぶやいた。
「えっ？　中を調べないんですか」
驚いて彼女を振り向く。
「床を見て」
葵さんは電灯の光を床の奥に向ける。そこには一面、柔

らかい泥が積み重なって、その上に、たくさんの足跡がくっきりと浮き上がっている。それはずうっと奥まで続き、その先は暗くてよく見えない。
「この穴は昔の防空壕か、抜け道として造られたようね。おそらく、あの西洋館の地下から」
「だったら、ここを通って行けるじゃないですか。せっかく来たのだから入りましょう」
ぼくは急かすように言う。
「でも、足跡はどうするの？」
「足跡？」
「泥に地下足袋の跡が残るわ。ほかの足形と違うから、はっきり区別がつく。犯人たちは、このアジトが発見されたと、すぐに気づく。もう二度とこの館には戻って来ないでしょうね」
葵さんは悔しそうに腕組みをする。
「ここまで……」
お雪もがっかりした様子を示す。
「やはり、あれね。塔に明かりが点いている時に乗り込んで、一網打尽にするしかないわね」
「ぼくら三人で？　相手は、少なくとも三人……いや、四人はいるかも……」
「生徒会から応援を呼ぶわ。会長の智世（ともよ）と副会長の美里（みさと）なら、安心して任せられる」
「蘭先輩も呼べば？　あの人、剣道強いですよ」
「とんでもない！　あんな危険人物」
葵さんは「ダメ、ダメ」と首を横に振る。まだ以前の仲たがいを解消していないらしい。
そこで決戦は次に延期し、取りあえず今日は引き上げることにした。
今度は、身軽なお雪が錆びた取っ手を伝って縦穴を上がる。
次にぼく。取っ手は、手足をかける部分だけツルツルに輝いている。ここの『霊』たちは、かなり以前からひんぱんに出入りしていたようだ。
最後に葵さん。彼女は地下足袋の底で、敷き石の上についたぼくらの足跡を丹念に消してから、縦穴を上がって来

た。
　みんなが地上に出ると、ぼくと葵さんとでコンクリートの蓋を元に戻し、その上に土や枯れ葉を載せ、ヒイラギナンテンの枝葉を寄せる。ちょっと見ただけでは、そこに地下道に通じる穴があるとは、誰も気がつかないだろう。
「ヤツら、いい出入り口を見つけたものね」
　葵さんは『ヤツら』と、彼（彼女か）らを、もうすでに凶悪犯人扱いだ。
「でも、あの人たち、塔の中でなにをしているのかしら？」
　ミステリーにはことのほか興味を示すお雪も、今度ばかりはアゴに手を当てて首をひねっている。
「麻薬や毒物。サリンか細菌兵器の密造。いずれにしてもロクなものじゃないよ」
　葵さんは「ふん！」と鼻を鳴らして、塀の上に顔を覗かせている塔の先端を眺める。
　そこには崩れかけた小窓が二つ、横に並んでこちらを見つめている。その黒く濁ったガラスの面が、まるで巨人の瞳のように、不気味な光りを湛えていた。

（第四話に続く）

「印旛文学の会」について

・本会は、「印旛文学の会」と称し、文芸「草の丘」を年に２回発行する等の文芸活動を行う。
・文芸「草の丘」は、簡易製本の冊子を若干部発行するとともに、ウェブサイトにその全文を発表する。
・会員は、印旛地域に関係がある、もしくは関心がある人で、詩や小説、随筆等を創作し、発表する者とする。
・会員は、年会費千円を負担すること。ただし、年会費では対応できない費用が発生した場合には、会員はその費用を分担するものとする。
・会員は、自作の未発表作品を投稿できるが、掲載については編集会議でその可否を検討する。
・作品の長さについては特に規定しないが、１回に掲載できる枚数は、原稿用紙で１００枚以内とする。
・その他、会の運営に関する重要事項の変更については、合評会等の場で、会員に諮って決するものとする。

そよのバアバの空中サロン

―その三　たらいの中の顔―

中川　とら

夏の盛りの日中は、何とも言いようのない静けさが、そこはかとなく漂う。

息がつまりそうな蒸し暑さに、人間も自然もすべてがじっと耐えているような、次第に単調になっていく音も、生ぬるい風の中にすーと遠ざかっていく感じ。

明るいのに寂しくて、鮮やかなのに陰うつ、時に怖いような孤独感すら覚える。

それなのに、えも言えぬ居心地のよさがあるのは不思議だ。いったいこの感覚はいつ頃からだろう。

ひょっとして、そうか、あの日、あの人のあの話を聞いたことがきっかけなのかもしれない。

中学最後の夏休み、わたしはおばあちゃんの家で、ソファーに横になり本を読んでいた。

エアコンが弱いので、じっとしていても首のあたりにじわっと汗をかく。やっぱり夏は畳の上が気持ちいいなと思いながら、いつもの眠気がおそってきた頃だっただろうか。

突然、チャイムが鳴ったので、「おやおや、どなたかしら」とおばあちゃんがモニターをのぞきこんだ。

「静子さんだわ。どうしたのかしら」
おばあちゃんは、いそいそとうす暗い北向きの玄関に歩いていった。

静子さんは、そよのバアバの棟一階に住んでいる人だ。年はおばあちゃんより四、五歳下なのだが、痩せて地味で、どことなく活気がないせいか、一見して年上に見える。ここに越してこられてから三十年近くになるのだが、十年ほど前にご主人を亡くされ今は一人ぐらしだ。一人息子さんがいて、大学を卒業し就職すると同時に家を離れ、ほどなく結婚されたらしい。それからは、めったに帰って来られないと、おばあちゃんに聞いたことがある。

二人は、静子さんのご主人がお元気だった頃からの長いお付き合いのようで、つかず離れず仲がいい。

お互いのベランダで育てた植物を愛で合ったり、珍しいお茶請けを持ち寄っては世間話に興じたりする。特に、互いの連れ合いを亡くしてからというものは、以前より声をかけ合う回数がふえた。

おばあちゃんは、誰かれと人のうわさ話をするタイプではないが、最近、静子さんの顔色がすぐれないのを心配している

静子さんは、いつもよりいっそうひっそりとした表情で部屋に入ってきた。わたしは、お邪魔になるだろうと思い、ごあいさつをしてから隣の部屋にうつり扇風機をつけた。

「和音ちゃん、来ていたのね」

「ええ、特別なことではないわ、夏休みだからね。気にしないでちょうだい」

「女の子はいいわね。そよのさん、しあわせだわ」

「ええ、そうね」と応えながら、おばあちゃんは小さな声で笑った。

ふすまの向こう側で、年をとった婦人が二人、夏なのに暖かいお茶を飲みながら向かい合っている。とぎれとぎれに聴こえてくる低い会話の声。ゆっくりした時間が幾分退屈気味に流れていくのが感じられて、わたしの眠気はいよいよ本ものになっていった。

どのくらいの時間がたっただろう。目が覚めた。一瞬、カ

ーテン越しの外の日差しが夕方のそれらしい色に変わったせいかしらと思ったが、いやちがう。わたしの脳が、普段聞きなれない人の声に反応したからだとすぐに分かった。

静子さんの泣き声だ。深い悲しみに嗚咽している声だった。わたしは軽くねがえりをうち、息を殺して、この尋常でない雰囲気に全身を集中させた。

静子さんが、涙しながら、おばあちゃんに語った話の内容は、中学生の私には想像もつかない遠い昔のちょっとこわくて悲しい物語だった。

それは、今から七十年ほど前の静子さんのお母さんの話しだ。名前をせつさんというその人は、とても器量よしで人柄が良かったため、のぞまれて近くに住む公務員の男性と結婚をした。

ところが判を押したように朝出勤し、毎日同じ時間に帰ってくるご主人は、又、大変無口な人で、食事の時ですら新聞から目を離さず、一切話をしたがらない。せつさんが話かけても「ふーん」と一言、言うだけで、一向に関心をしめさない。小さな庭付きの官舎に住み何かとご近所に気をつかう日常の中で、せめて夫ぐらいは、心通わす話ができたらと願っていたが、叶わぬ月日はつづいた。

趣味といえば、新聞を一面から全紙面読み切るのが日課ぐらいで、賭け事や道楽はもちろん、他のことをしているのを見たことがなかった。夫婦の夜の生活も忘れたころ思い出したように済ますといったもので、せつさんは自分があたかも飼われた猫のようだと、いっしょになったことを悔やみ始めたらしい。

一時、自分の身の回りに少々のおしゃれを楽しんだり、映画を観に出かけたりしたけれど、帰る家は変わるわけもなく、又同じ生活が繰り返されるという中、せつさんにある噂が立ち始めていた。

「どうも家に誰か居るらしいよ。だって、庭先で洗濯しながら、誰かと話をしているのを見たことがあるもの」

「私も見た」

「私も聞いたわよ」

噂は、まことしやかに拡がって、「せつさんには、愛人がいるらしい」ということになった。本人はと言えば、近所の

人たちが妙に自分を避けているような、時にチラチラと見ながらヒソヒソ話をしている……と感じていたものの、そんな内容になっているとは知るよしもなかったらしい。

ある日、夕飯を終えたご主人が真顔でポツリと言った。
「おまえ　しばらく実家に帰るといい」
「どうして　ですか」
「病気だよ」
「わたしが？」
「ああ、元気になったら帰ってきなさい。後のことは、気にしなくていい」
「はい」
せつさんは、腰が抜けたようにしゃがみこみ、その場で顔をおおい声をあげて子供のように泣いた。
初めて、夫と会話らしい話ができた。しかしそれが自分を心配してかけてくれた言葉とはいえ、こんなことになるとは……。
その後、実家にもどったせつさんは、妊娠していることが分かり、そのまま実家で静子さんを出産したということだ。

ご主人は、その後も大した変化はなかったが、さすがに子供は可愛く、おもちゃを買ってきて、たまにあやしたりすることはあったらしい。
静子さんが成長し、娘さんになると、せつさんは繰り返し、彼女にこの話をしたという。時に涙を浮かべて。
ある日、静子さんは母親のせつさんに訊ねた。
「お母さんは、洗濯しながら誰と何を話してたの？　覚えてる？」
「ああ」
一瞬せつさんの表情にさびしいものがよぎった。
「たらいの中に映る顔と話していたのよ」
「えー　それって誰の顔？」
「自分の顔よ」
「……？」
「水の中でゆらゆら揺れてる自分を見てるとあんまり可愛そうで、話しかけずにいられなかった。たわいもないことなのよ、内容は。
あなたは、よく頑張っているわ。よく耐えてる。貯金が貯まったら必ずここから出て行きましょう。もう懲り懲りだわ。

たまに他の誰かを想像して、今日のご飯はおいしかったでしょとか。そのネクタイはお似合いよとか。日曜日には一緒に出掛けましょうとか」

せつさんは、苦笑いしながら、「おかしいような、なんだか悲しい話ね」と言ったそうだ。

しかし、その後のお母さんの言葉が、いつまでも靜子さんの心に残ることになった。

「あなたには、こんな思いはさせたくないわ」

しかし、どういうめぐりあわせか、靜子さんのご主人もまた無口な人だった。

真面目で友人が少なかったご主人は、家に居ることが多いので黙っていられることは、辛かっただろう。退職されると直ぐに病気になられ、振り返れば、あっという間の二人の人生だったと述懐されながらも、「お勝手で水仕事をしているとね。時々、私も母の若い頃のようになるんじゃないかと、そんな不安に襲われるの。そうすると、洗い桶に水をはって、自分の顔を映してみたくなるのよ。今でもよ。そよのさん、一人って寂しいわね」

靜子さんは、押さえきれない声で嗚咽し続けた。

わたしは、靜子さんの話を襖越しに聞きながら、理解しがたいその内容の中に、大人になり、いつか自分も経験するやもしれない悲しい予告のようなものを感じていた。

「一人って寂しいわね」

靜子さんの絞り出した一言が、いつまでもいつまでも耳から離れなかった。

それからどれくらいたっただろう。靜子さんの泣き声がおさまった頃、「お母さんは、大そうご苦労なさったのね。本当に、お察しするわ」

今まで、ただ黙って話を聞いていたそよのバアバのいつもの優しい声がした。

「落ちついた？　甘いものでもどう。少し元気になるでしょう」

「ありがとう」

きまり悪そうな、でも気をとり直した靜子さんの声だ。

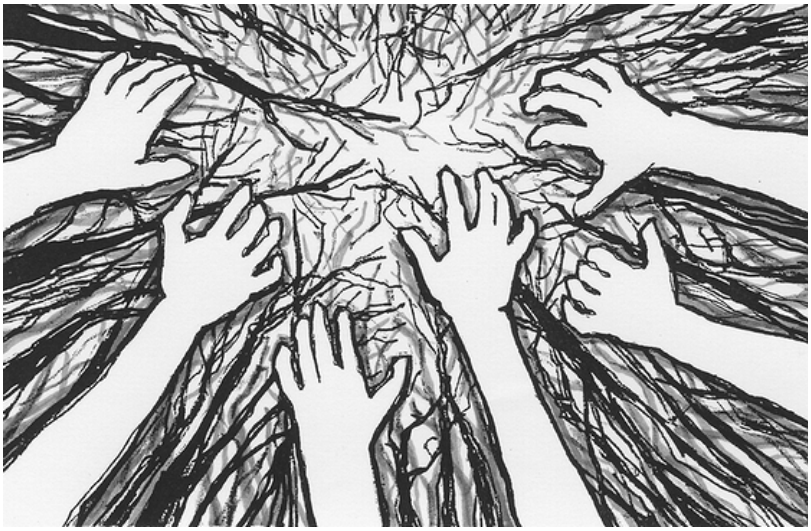
わたしは張りつめた糸が一気にゆるんで、急にのどが渇い

てきた。しかし、今はまだ、部屋から出るのは失礼だ。
「これ、おいしいわね。そよのさんの手作り？」
「ええ、赤じその葉を甘く煮て、餡をくるんだだけよ」
「冷たくて口あたりもいいわ」
「夏は、冷やすとどんなものもおいしくいただけるわよね」
ああ、わたしも食べたい。静子さんは、元気になってきたようだから、もう少しの辛抱だろう。
お客さんは、おばあちゃんに言った。
「大変、お恥ずかしい話を聞いていただいて、お陰さまで心のつかえがおりたみたい」
「誰だって、やり場のない心の闇のようなものはあって当然よ。思うようにいかないことのほうが、実は多いのかもしれない。その時の時代がそうさせる場合もあるだろうしね。あなたもお母さんもご主人が全ての原因とは言い切れないんじゃないかしら。悲観的に思い込んで、それがトラウマになるということもあるわよ。それにしても、お母さんいいことを思いついたわよね。水に映る自分自身に話かけるなんて、きっとそれで救われていたんでしょう。そうよ、『水に流す』ってことわざもあるくらいですもの。わたしもやってみようかしら。顔がはみでるかな　ほほほ」
「やーだ　そよのさんたら」
二人は　楽しそうに笑った。
「静子さん、人生、最後は一人ぼっちという人は、今や世の中にあふれているわ。あなただけが寂しい人ではないんだからね。体に気を付けて、私でよかったら声をかけてちょうだい。」
静子さんは「ありがとう」を何度もくり返していた。
帰り際、おばあちゃんは日の落ちかかったベランダに静子さんを誘った。
「まあっ　咲いたのネ！」
そこには、種から育てた『もみじあおい』が二鉢、真紅の花弁をどうだと言わんばかりに広げている。二人はため息をついて言った。
「いいわねー」
おばあちゃんは、静子さんの少し丸くなってきた背中に手をあて、やさしくそこをさすった。

（その三　おわり）

自由とストレス

畑中康郎



自由とは簡単に言えば、自分の好きに行動でき、それが誰からも妨げられないということだ。勿論、法に反しないという条件がつくが、何を研究しようと何を信じようとどんな仕事をしようと、そしてどんな行動を起こそうと、それは自己の判断に委ねられる。（日本国憲法　第十九条思想・世界観の自由、二十条信教の自由、二十一条集会・結社および表現の自由、二十二条居住、移動および職業選択の自由、二十三条学問の自由等）

そうした自由を前提に一億の人を見たとき、一億すべての人が異なった価値観を有している。競争に勝ち抜き、人の上に立って集団をリードしたい人がいるかと思えば、人知れず社会の片隅にひっそりと静かに生きたいと考える人もあるだろう。ところが、もしも親に経済力がある場合や家系の中に世に一人でも歴史に名を残した人物がいる場合など、子供がどんなに勉強嫌いであっても親は高等教育を受けさせ、結果、世に出て家名を高めてもらいたいと考える。そこには勉強嫌いな子供が考えるところの自由が入り込む余地はない。親の価値観に強制的に同調させられるわけだ。この無理強いが子供にとって大変なストレスになる

のだが、親はこの現実を知ろうともしない。

次に、最高学府での教育を受けて、社会に無事就職できたとする。大学でなくてもいい、高校卒だって努力次第で社会で重きをなすことが出来るとしたなら、親の望むところに従って自分を鞭打ち、本来の自分が持つ能力以上の負荷をかけて努力しなければならない。そうでなければ世に名を成すことは覚束ない。出世するには相手がいることだから、当然そこに熾烈な競争が生まれる。生き残りをかけて殺し合った戦国時代と同様に現代もライバルとの精神的な殺し合いを日々続けることになる。そこにストレスが生まれないはずがない。本来なら、競争を好まず人と仲良く穏やかに交わりたい人も競争の場に立たされたら勝たねばならない。勝つことを目的に自分を苛め抜かねばならない。そこには想像以上の負荷がかかるからストレスは間違いなく昂進する。

ところが、翻って江戸時代、士農工商の身分があったころ、人々の生活は生まれた時から進む方向が決まっていた。武士の家に生まれた人は武士らしく、農民に生まれたら農民らしく生きる。そこに競争は存在しなかった。武士として生れた場合でも家には格というものがあり、家格の壁を越えて出世することなど考えることもなかった。だから、武士に生まれた場合でも分相応に生きることになる。

一見、自由がないから窮屈のように思われる。だが、そこには競争がないから精神的にかなり楽である。親族から期待されることがあっても、それは一定の範囲内であって、大抵は過分な努力を求められるものではなかった。所与の限られた自由の中だから彼らの心の裡は常に平安で、余計な悩みは抱えなかったであろう。競争がなければ、他人に対する思いやりも自然と生まれる。そして貧乏な町人同士は一緒の仲間だから、困ったときに助け合い、自分の食い扶持を減らしてでも他人の難渋を見て見ぬふりはしなかった。

こうしたことから、心に平安をもたらした江戸時代をもう一度見直してもいいのではないか、という気運もあるように聞く。江戸社会には優しさがあった。考えようによっては、現代よりずっと生きやすい。

その時代を生きた人々は、生まれた時から生きる方向は定められ、分相応の価値観を植え付けられた。したがって、

自由に生きることに至上の価値を置く現代人には耐えられないかもしれない。そんな封建的で不自由な時代を嫌悪する人も多かろう。

だが、私には自由過ぎる現代が生きにくい時代と思われて仕方ない。溜まったストレスのはけ口はより弱い立場の人に向かう。例えば、客と店員の関係において顕著だ。少しでも意にそぐわない店員の対応に直面したとき、客は激しい怒りを店員にぶつける。金を出す立場の方が強いのである。それは生徒を学校に預ける保護者と教師との間でも見られる。私が幼少時、教師は生徒の過ちを正すために場合によっては鉄拳制裁もあり得た。だが、今もしそれを実行したなら教師にどんな悲運が待っているか明らかだ。所謂モンスターペアレントといって、徹底的に教師や学校側を責め立てる。責めることを権利だと思っているからだ。これでは思い通りの教育などできない。これも溜まったストレスのはけ口として立場上弱者に向けられる結果なのだ。大きな声を出す人に限って、実は別の場所でいじめられストレスを溜めている。実は、弱い立場の人に辛く当たる人こそ、余裕のない弱い人なのである。

他人をへこまして自己主張を展開し、権利ばかりを主張して義務遂行を疎かにする現代人を本来の優しい性格に導くのは不可能なのか。行き過ぎた競争、強者ばかりを崇める風潮は現代人をますます袋小路に追い詰めることになるだろう。

そろそろ価値観の転換を考える時期に来ていると思う。それには、日本が世界で唯一成功したといわれる社会主義に近い、かつての日本的システムを取り戻したらよいのではないか。しかしこれも今となっては難しいだろう。世界はすでに一体化しており日本だけが独自路線を進むことはできない。競争の比較的緩やかな世の中を作ればいいとは思うが、これも不可能だ。正社員・非正規社員の壁を作ったことは競争を促進させる大きな原因ともなった。自分だけは、正社員になる。この思いは競争に勝つことを意味する。ここでも結局競争だ。人生が競争なくして生きられない以上、どんな試みも空しい。

ところで、これまで述べたことは、日本だけの問題ではない。全世界共通の問題である。結局人類は進むところまで進み、行き過ぎたシステムが崩壊して、やっと解決する

という宿命を背負っているのだろう。システムの崩壊はどうやって起きるのか、戦争なのか大災害なのか、それは現時点ではわからない。だが、それはいずれにせよ必ずやってくる。

老境に入り、やっと少しずつ人生が分かりかけた私はこう考える。競争をして他人に勝ち、自分だけが多少の出世をしたからといって、それがなにほどのことであろうか。結局は、心が貧しいままに生涯を終えて、死ぬときに後悔の臍を噛むだけのことではないか。人生の真の勝利者とは何か、もう一度人はじっくり考えるべきときにきていると思う。

（了）

宿場町と共に消ゆ

香取　淳

一、

灌木と藪に覆われた急斜面を登り抜けると、丸みを帯びた枯れ場に出た。勾配も少し緩やかになり、山頂までもう幾らもない。左前方に一際高く南アルプスの連峰が聳え、その奥に小さく富士山が見えてきた。小石を踏みしめて登ること二、三分、山頂には大きな岩が重なり、『入笠山　一九五五メートル』という小さな木札が立っていた。

この山は南アルプスの南端にあり、日本の中央にある多くの峰を見渡せる。北を向けば眼下に諏訪湖とそこから伊那谷に伸びる天竜川、銀色の湖面の遥か先に北アルプスや中央アルプスの白い峰々、東には八ヶ岳が屏風のようにそそり立ち、ゆったりした裾野を広げている。

急峻な登山道を這うように登ってきた妻が、山頂近くに平たい岩を見つけて腰を下ろした。そして、隣のスペースを夫に勧めるが、夫のキョシは少しも疲れを感じてはいない。妻の歩調に合わせてゆっくりと、しかも休み休みに登ってきたからである。彼は、使い慣れたデジカメを手に、山頂をぐる

りと巡ってファインダーを覗く。そして絶え間なくシャッターを押して、パノラマのような眺望を方形の映像に切り取っていく。

下山ルートは、来たときより岩場が少ない迂回路を選んだ。しかし、その迂回路は窪地で湿っているうえに熊笹が生い茂っている。その熊笹をかき分けるように降りてきた二人は、尾根伝いの登山道に戻ってくる。そして、樅やダケカンバ、落葉松などの林を抜けて麓のロッジまで降りてきた。

前回来たときには、ロッジの前に車を停めて、そこから山頂を目指した。今回もそうする予定であったが、車は目的地の少し手前で行く手を阻まれた。通行止めの柵に戸惑う夫妻に係員が近づいてきて、「ここから先は歩くか、それとも引き返してロープウェイに乗るように」と指示する。理由は自然保護のためだというが、本当か否かは定かではない。仕方がなく夫妻は来た道を引き返し、ロープウェイの乗り場に車を停める。そして、数百メートルの高さを再びゴンドラで昇って、そこからさらに一時間余り歩かされる羽目に陥った。

ゴンドラを降りた先には、すり鉢状の湿原地帯が楕円形に広がっていた。枯れ芝に覆われた湿原を二分する木の歩道を低地まで降りると、狭い湿地に十株余りの水芭蕉が咲いている。その湿地から登りになる木の道を渡り、十分ほど林道を歩いてロッジまで辿り着いた。

そのような経緯で、登山に掛かる時間は大幅に延びたうえ、さらに帰りの予定まで変更しなければならなくなった。

家を出たときキヨシは、ロッジの前で車を妻に預け、別行動を取る心算であった。いま立っている場所のすぐ下に細い林道の入口がある。注意しないと気付かないほど細い道であるが、彼はその林道に入り、途中にある『金山の遺構』を確かめたいと思っていたのである。

しかし、車は数百メートル下のゴンドラ乗り場に置いてきた。体が弱い妻を山奥で放り出し、一人で山中を歩かせる訳にはいかない。仕方がなく彼は、当初の計画を諦め、来た道をゆっくり戻り始める。

「ほら、ここが前に車で登って来た林道の入り口」

「えーッ、こんな急坂を？」

「そう、普通の人はまず走らないな。ジープか四輪駆動車でなければね」

「そういえば台風が通過した後で、ひどい道でしたわね」
妻が十数年前のことを思い出して、感慨深げに言う。キヨシもその言葉で荒れ果てた道を思い出した。切り掘りした赤土の山肌の所々に小さながけ崩れや雨水に抉られてできた深い溝。その溝に山中から大きな石や木の根などを運んで、溝を埋めながら苦心して登った。
その脇道の入り口を通り過ぎて、二人は柔らかな新緑に包まれた坂をゆっくり下って行く。キヨシは無意識に歩を進めながら、細い脇道に入って森林の中を降りて行くときの情景を思い描いた。

そこは海抜が千六百メートルというから、現在地より少し低い所にある。歩くと三十分ぐらいの平坦な地で、『千軒平』と呼ばれる。前回、車で行ったときには坂道の勾配が緩やかになって視界が大きく開けた。車窓からは八ヶ岳の青い連峰を望むこともできた。そして、道がV字に曲がる角地に、『金鶏(きんけい)金山付近略図』という看板が立てられ、周辺に点在する金山の遺構が描かれていた。
キヨシは高校生の頃、その千軒平によくやってきた。春から初夏には山菜や蕗、夏の終わりにはアケビ、そして秋には茸や山ブドウが採れたのである。当時は観光看板など立ってはいなかったが、彼はその土地の謂(いわ)れをよく知っていた。その昔、金を採掘するために多くの坑夫がここに集まってきた。その坑夫たちが住む家や小屋が千軒も並んでいた……という史実に由来しているのである。
キヨシは秋の茸狩り、とくにナメコに似たクリタケを探してこの辺をよく歩いた。大きなビクを背負って林の中を歩きまわると、人工的な窪地が目の前に幾つも現れる。広い湿地や土で築いた堤の跡にも出くわした。しかし、その時はクリタケ探しに夢中で、窪地や堤にはまったく関心がなかった。
いま思い起こすと、それらはかつて武田信玄が金を掘り出したときの遺構であった。足を滑らせないように気を付けた窪地は『吊るし掘り』という露天掘りの跡で、土盛りした堤の上には溜池があった。その溜池の水に細かく砕いた鉱石を晒して、底に沈んだ砂金を採取したのである。

この金鶏金山は信玄の死後も採掘が行われ、昭和の初期まで続いたという。江戸時代に入って坑夫が二十人以上も死亡する事故があり、当時の諏訪藩主により稼業中止になったこともある。天保十年、西暦では一八三九年のことである。その事故で死亡した坑夫やこの地で生涯を閉じた人たちの墓が遺構の奥に何基も残されていたというが、キヨシは直接見たことはない。昼でも薄暗い樅やダケカンバの林の奥深くにまで入り込むのは気味が悪かったのである。

湿原を横切る木の歩道を渡り、夫妻はロープウェイの乗り場に戻ってきた。六人は乗れるゴンドラに、二人は下方を向いてゆったり座った。ゴンドラが宙に浮くと正面に蓼科や八ヶ岳の峰が水平に連なり、広大な裾野にはビニールハウスと思われる銀色の縞模様が描かれている。

十分余りで麓に降り立ち、夫妻は駐車場でトレッキングシューズから革靴に履き替える。キヨシは小型車のハンドルを握り、先ほど断念した下山ルートの終点に向かった。その終点というのは、『大沢』という集落で、キヨシが生まれた村の南端にあり、標高も村で一番高かった。

彼は民家や田畑の間を走り抜け、細い農道を山林の際まで上り詰めた。そこで車をターンさせて、今度はいま走ってきた道を低速でゆっくり降りて行く。畑の端に植えられた背の低い藤が満開で、民家の庭のユキヤナギやツツジが色とりどりに咲いていた。

斜面に建つ数十戸の家を左右に、しばらく坂を下ると再び旧い民家と小さな十字路に差し掛かる。その十字路を真っすぐ進めば青柳（あおやぎ）という駅に、左折するとその昔、金沢宿（かなざわしゅく）という宿場で栄えた家並みの中に入って行く。

キヨシは今まで、この辺りを丁寧に観察したことがなかった。今回は故郷の歴史とその後の変貌を検証したかったので、いままで気に掛けたこともない場所にも興味が湧いた。

「この交差点は恐らく甲州街道の跡だと思うな、ちょっと降りてみる」

そう妻に言い残して、彼は小型車を路肩に寄せて外に出た。

金沢宿というのは、甲州街道四十四宿の一つで、日本橋の起点から数えて四十三番目に当たる。次の上諏訪宿を経て、

下諏訪で中山道に繋がる。金沢という地名は先ほど山中でキヨシが思い起こした金鶏金山に由来していることは疑う余地もない。

いまキヨシが立つ交差点を左折して二百メートルほど坂道を下れば宿場町の入り口に至り、そこで広い国道二十号線と繋がる。その国道は、宿場町の入り口に作られた桝形（ますがた）の屈曲を経て上町に入る。両側に家が立ち並ぶ道は中町に、そして本町で右に折れて下町へと続いて行く。現在地から鳥瞰（ちょうかん）すると、宿場町は『く』の字型をしていて、その長さはおよそ七百メートル。彼が幼かった頃には往時の家並みが保たれていて、砂利道の左右に奥行きの深い家が隙間なく軒を並べていた。その旧い宿場町の北の外れにキヨシが生まれた家があった。

何の変哲もない旧道を何度か行き来して、キヨシは運転席に戻ってきた。そして、「久しぶりに来たから、駅も見ておきたい」と妻に言いながら、小さな十字路を真直ぐに進んだ。道は急坂を下り、国道二十号線とクロスする。そのクロスを突き抜けると左手の谷間に小さな駅舎が見えてくる。

キヨシにとって、この駅は懐かしい。というのは高校時代に列車通学をしていたからである。彼は毎朝、時間ぎりぎりに家を飛び出し、一キロ半ほどの砂利道を急いだ。互いに向き合った旧い家の間を早足で進むと、宮川（みやがわ）を見下ろす崖沿いの道に差し掛かる。『宮川』は、源流が諏訪大社の狩場であった御射山神戸（みさごうど）にあり、前宮、本宮の前を経て諏訪湖に注ぐ。その諏訪大社に所縁（ゆかり）がある川の上まで来ると、眼下に駅と川沿いに伸びる鉄道が遥か先まで見渡せた。しかし、駅まではまだ四、五百メートルもあり、しかもかなりの登り坂である。そこで決まったように下りの汽車の煙が見えてくる。彼はその煙と競争するかのように全力で道を駆け上がり、その先の坂を下って改札口に滑り込む。毎朝、列車が到着するのと改札口を通り抜けるのがほぼ同時であったが、乗り遅れたことは一度もなかった。

この駅と広場には、高校時代のほかにも数多くの思い出がある。幼い日に父に手を引かれて歩いた砂利の広場、それは恐らく善光寺参りに連れて行かれたときのかすかな記憶。さらに出征する兵士を見送る人々の先頭に立って、日章旗を掲げる軍服姿の父の写真。その多くは青柳駅のホームで撮影されたものだが、それらが貼られたアルバムもいつの間にか姿を消してしまった。在郷軍人で、出征兵士に召集令状を出し、この駅から戦地に送り出す役割を果たしていた父は、戦後は戦犯の一人として公職から追放されている。

キョシは宮川に架かる橋を渡り、駅前の広場に車を停めた。かつての細かい砂利を敷き詰めたイメージは裏切られ、広場はアスファルトで舗装されている。それでも昔の光景が残されていないものかと車のドアを開け、広場に出た。妻にも声掛けをしてみたが、彼女は車中で待っていると言う。彼は一人で駅舎に向かい、出札口に近づいた。狭い待合室に数人の客はいたものの駅員の姿は一人も見えない。無人駅に変っていたのである。

彼は改札口を潜り抜け、ホームに立ってみた。その人気のないホームからの眺めは、昔とまったく変わってはいなかった。彼は首から下げたデジカメでホームの上りと下りの二方向を撮影して、車に戻ってきた。先ほどまで助手席にいた妻が、運転席に移っている。そして、開いた窓から「ここで運転を代わりましょう」とキョシに声を掛けた。

その妻の言葉に従い、彼は助手席のドアを開けてシートベルトを締める。車は駅前の橋を渡り、短い坂を上って国道二十号線に入った。宮川を見下ろす崖縁の道を左に曲がると、旧街道と合流して家並みの中に入って行く。そこはかつての宿場の上町にあたり、緩やかな下り坂。すぐに中町になり、くの字に屈曲した十字路が見えてくる。

「この先の信号を、左に入って」

キョシの指示に従い、妻はハンドルを切った。その道は車がやっとすれ違えるほどの広さで、わずかに上り勾配である。

「突きあたりが金沢小学校、僕の母校だよ」

百メートルほど入った突き当たりにコンクリートの校舎が建っていた。白い方形の建物であるが、こちら側はチョコレート色。巨大な板チョコを縦にして壁に張り付けた感じである。校門の前に車を乗り入れると、パルテノン神殿を想起

させる円い石柱が四本立っていた。それらの白い石柱の間を潜って子供たちは校内に入る造りになっている。
「僕らの頃は木造だったけど、昔のイメージは全く残っていないな」
「それは、そうでしょうよ。もう半世紀以上も経ったんですもの」
妻は、そう言いながら校門の前で車をターンさせる。
「昔は左手に養蚕所(ようさんじょ)があってね、父が孵化したばかりの小さな蚕(かいこ)を買い込んだり、とれた繭(まゆ)を大きな袋で納品したりしていたな」
「そうなの、あなたの家でもお蚕を飼っていたわけ？」
「ウン、夏場は蚕に家中を占領されてね、僕等兄弟は狭い部屋で重なり合うようにして寝たものだよ」
「フーン、養蚕が盛んだったのね」
「そう、養蚕と製糸工業。この地方は生糸の一大産地で、岡谷を中心に諏訪谷の至るところに製糸工場があったようだね」
「エーッ、岡谷だけではなかったの？」
「そう、今いるこの辺りも、戦前は製糸工場だったようだ」
車はゆっくり坂道を下り、国道との交差点で停止した。
「左手が本陣の跡だけど……。とりあえず真直ぐに進んで」
信号が変わり、妻は向かいの小路に車を進めた。交差点を渡った右手に砂利を敷き詰めた空き地があった。そこに車を停めさせ、キヨシはデジカメを首に掛けて外に出た。
くの字に曲がった国道に交差する細い小路、その変則十字路の角地は細長い空き地になっていた。奥には背丈の低い鉄製の火の見櫓、その下には青草が生え、本陣の跡地であることを示す看板が小さく建てられている。さらに看板の脇には子供の背丈ほどの石塔があり、そこに明治天皇が宿泊した地であることが記されている。
キヨシが小学生であった頃には、ここに古い本陣の門が神社のように残されていて、その門を取り込むように本陣問屋の大きな屋敷が建っていた。そして、道を挟んだ向かい側には間口が広い下問屋の旧い家屋が、平たい屋根を左右に長く伸ばしていた。
しかし、その残像は微塵もなく打ち砕かれてしまった。い

ま、キョシの目の前にあるのは住みやすさを重視した現代風の住宅であり、建物の向きも街道側を向いてはいない。この場所に、かつて宿場町の本陣があった……と誰かに言われたとしても、俄かには信じられないほど変わり果てた光景である。それでも彼は、金網で囲まれた本陣の跡地やその周辺の殺風景な建物をデジカメに写し撮って、妻が待つ車に戻ってきた。

再び国道に出た車は、下町の緩やかな坂を下って行く。左右の家並みが途切れた先で道は右手に曲がり、水量が増えた宮川を斜めに渡ると、右前方に小さな森が見えてきた。

「少しゆっくり、あの森のところでストップ」

キョシの指示で、妻は車のスピードを落とした。

「あれは『権現の森』と言ってね、武田家が滅亡した後に金山を下りた人たちが造ったらしい。金山にあった権現をこの場所に移したらしいな」

「へぇー、ここには何度も来たけど、今回は随分詳しいわね」

「ウン、小中学校の同級生が貸してくれた本、『信州金澤の歴史』という書物に詳しく書かれていたよ」

「それで、今日はその歴史を検証しているわけ?」

「そう、その通り。ここは矢の口と言って、八ヶ岳山麓の村々、土地の人が山浦と呼んでいた地域に繋がる道と、金沢峠を越えて高遠や伊那に向かう道との交通の要所……と言うことのようだね」

饒舌になったキョシを横目でちらっと睨みながら、妻はウインカーを点滅させて路肩に車を停めた。

「この道の左手に、現在地に移転する前の宿場町、『青柳宿』と呼ばれた宿場町があったようだ」

そう言いながらキョシはドアを開けて外に出た。まばらな家の回りは水田で、植えたばかりの苗はまだか細くて弱々しい。その水田を二分する国道の脇に、細い農道が真っすぐに伸びている。国道より少し西向きであるが、どうやらその道を取り囲む形で青柳宿が形作られていたようである。ときは江戸時代の前で、武田信玄が諏訪氏を滅ぼし、さらに信州一円に勢力を伸ばしていた頃のことである。信玄の信濃への侵攻の様子を描いた古文書に青柳宿が登場するという。

しかし、青柳宿は平坦な低地にあったため、水害に対して弱かった。諏訪谷を南北に流れる宮川と、八ヶ岳方面から流

れ込む矢の口川の度重なる氾濫に何度も晒された。加えて慶安四年(一六五一)には宿場の大半を焼き尽す大火に見舞われている。その大火の翌年、青柳宿は現在の山裾に移転し、町の名を金沢宿と改めた。

「そういえば、あの線路の下に我家の田圃が二枚あってね、そこを、父は『焼け屋敷の田圃』と呼んでいたな」

彼は、右前方を指差しながら、車から降りてきた妻に話し掛けた。

「焼け屋敷ですか、昔の出来事が地名に残っていたんですね」

「ウン、歴史というのは知れば知るほど面白い」

夕闇が迫り、周囲の山が黒一色に変った。国道を行き来する車も、その色や形が失せてヘッドライトとテールランプだけが目立っている。ハザードランプを点滅させた車に戻りながら、妻が言った。

「キヨシさんは実家に関心がないの？　すぐ近くまで来たのに」

「いや、そんなことはないけど、この時間ではね」

「それじゃ、明日にする？」

「ウン、午前中にちょっと顔を出してから墓参りをしよう」

妻は、キヨシの言葉に頷いてアクセルを踏み込む。車は町明かりの乏しい国道を三十分ほど走って、諏訪湖の湖畔に建つホテルに着いた。

キヨシが目覚めた時、外はまだ暗かった。時計に目をやると午前四時。昨夜は風呂を浴びて、ホテル内の和食店で食事を済ませた。部屋に戻って、ベッドに横たわる。山歩きで疲れたためか、テレビを眺めているうちにぐっすり寝込んでしまった。物音一つしない静けさ。隣のベッドから妻の軽い寝息が聞こえてくる。

昨日、久々に見た故郷の変わり果てた光景が脳裏に蘇ってくる。とくに小学校の入り口の空き地は、キヨシの期待を大きく裏切るものであった。かつて、あの場所には本陣問屋の大きな屋敷が建っていた。その旧い屋敷に、彼は幼時に頻繁に出入りをしたことをおぼろげに覚えている。その家は伯母が嫁いだ親戚であることに加え、キヨシの母が嫁ぐ前に働いていた家でもあった。恐らく、赤子の時にはあの家に母に背負われて行き来し、彼が三歳になった春に母が病死した後は、

歳の離れた姉に連れられて出入りしたに違いない。
キョシには伯母に関する記憶はまったくなかった。それというのも彼女は戦後の間もない時期に他界している。子沢山であったその家は、家事を切り盛りしていた女主人を失い困り果てた。近所に嫁いでいた娘たちやキョシの母親、二十歳過ぎのキョシの長姉たちは、急死した伯母に代わって家事を手伝った。サキチャ、キミチャ、キシチャというその家の姉妹やヒロチャというキョシの姉の呼び名が耳の底に残っているのは、恐らく彼が幼い時に台所や居間で頻繁に聞いていた名であることによると思われる。
キョシは、本陣問屋の跡の家で新しい物事や知識に触れることが多かった。とくに次男のキョジサは東京の大学病院に勤める若い医師で、たまに帰省した折には親戚の子供たちを喜ばせたり驚かせたり。たとえば手土産に持ち帰ったバターとチーズ。キョシは生まれて初めて見る食べ物に恐る恐る手を伸ばして臭いをかいだり嘗めてみたり。しかし、何とも奇妙な味で、とても旨いとは思えない。キョジサは「アメリカでは毎日食べているものだよ、もう少しどうだ」と勧めるが、キョシは二度と手を出す気にはなれなかった。
キョジサは、手品を見せてくれることもよくあった。右手の親指の先を折り曲げ、その先に左手のそれを先端だけ繋ぎ合わせて人差し指で繋ぎ目を隠す。そして、「ほーら、親指がながーく伸びたり元に戻ったり」とキョシや親戚の子供たちを驚かす。トランプを使った手品も得意で、幾つかを手際よく披露した後で、種明かしを教えてくれたりした。
幼いキョシにとって最も鮮烈で印象深い思い出は、キョジサの結婚式である。当時の結婚式は『婚礼』と呼ばれ、大抵は自宅で執り行われた。キョジサの場合も本陣問屋であった屋敷の奥座敷で行われた。婚礼が始まると、床の間を背に飾り雛のようにキョジサと花嫁が並んで座る。その花嫁はこの世のものとは思えないほど美しく、お伽の国からやってきたのではないかとキョシは我が目を疑った。座敷には多くの親類縁者が集まり、祝いの唄や踊りなども披露されたに違いない。しかし、そのようなことは一切記憶になく、只々、花嫁の美しい顔や凛とした佇(たたず)まいが脳裏に焼き付いている。
妻が目を覚まして手洗いに立った。それを機に、キョシも

ベッドから立ち上がり手早く洗顔を済ませる。身の回りの品をスーツケースに詰め込み、館内のレストランでバイキング料理。時間が遅いためか客はまばらで、夫妻は余裕のあるテーブルに好きな料理を運び、食後のコーヒーをゆっくり啜った。

二人は小型車のトランクに荷物を押し込み、国道を南に引き返した。途中のスーパーマーケットで妻が生花と線香を買い込む。昨夕、車を停めた権現の森を過ぎて、橋を渡ったカーブの終わりで左の小路にハンドルを切る。その細い道の突き当りが、キヨシの生まれた家である。しかし、生家といってもキヨシにとっては愛着もなければ思い出もない。彼が大学を卒業して間もなく、長兄が古い家を取り壊して現代風の住宅に建て替えていた。

その馴染みのない家の脇に、キヨシが幼時から親しんできた如意輪観音が祀ってある。その観音は昔から地域の人に親しまれ、大切にされてきた。観音の白い帽子と前掛けは常に取り替えられ、花や供物も絶えることがない。

「この観音様はね、小松三郎左衛門という人を偲んで建てられたものだよ」

キヨシは観音像が納まった祠（ほこら）とその脇に並ぶ石碑の前に車を停めて、妻に話し掛けた。これまで生家には何度も来たが、眼の前の観音のことは妻に話したことがなかった。それというのは、この観音像が建てられた理由が暗くて凄惨なことと、彼自身も詳しい史実を知らなかったためである。

眼の前に立つ如意輪観音もまた、甲州街道金沢宿との関係が極めて深かった。本陣問屋の主は代々世襲制で、金沢宿の場合は小松三郎左衛門という人物が務めていた。しかし、小松家は四代目で断絶している。断絶の理由は、隣の千野（ちの）村との山論（さんろん）（金沢山という山林の所有権を巡る争い）の咎（とが）により、磔（はりつけ）の刑に処されたためである。三郎左衛門は眼前の観音の近く、かつて堤防が整備されていなかった頃には宮川の河原であったところで磔にされ、村民が見守る中で三四歳の命を絶たれた。その罪状は、山論に没頭するあまり、本来の問屋業務を疎かにしたというものであった。しかし、実態は三代

目の三郎左衛門が、山論の正当な解決を直訴しようとしたことへの処罰、江戸に出向いて直訴する行為が近隣の村々に悪影響を及ぼすことを恐れた藩主による見せしめであった。延宝六年（一六七八）に執行されたこの処罰は、諏訪地方における唯一の磔刑であったという。有名な佐倉惣五郎の物語とほぼ同じことが、この地においても起こったのである。

その後、本陣問屋の主は白川家に入れ替わり、江戸時代の終わりまで引き継がれた。しかし、白川氏は明治になって間もなくこの地から離れている。残された旧い屋敷を買い取り、本陣問屋跡の持ち主となったのは生糸工場を営む牛山家で、そこはキヨシの伯母が嫁いだ家であり、母が奥女中をしていた家でもあった。

「三郎左衛門の命日は十月二十五日でね、毎年命日になると『甘酒祭り』をやっていたな。甘酒を作るのは父の役目で、近所の人たちが供養に集って来たものだ」

「お父さんは、甘酒が作れたの？」

「ウン、料理が得意で何でも。法事などの集りではオコワやオハギからフナの煮付やキントン、羊羹に至るまで」

「そう、凄いわね。だったらお母さんがいなくても心配はなかった？」

「いや、滅多に台所には立たなかったな。大勢の客をもてなすときだけ」

「男子、厨房に入るべからず、という風潮によるものかしら？」

「多分ね、父が若いときは軍人だったから」

話が一段落すると、キヨシは車をバックさせて長兄の家の前に移動させた。そして、手土産が入った紙袋を下げて玄関の戸を開ける。

長兄は九十歳に近い高齢で、耳が遠かった。キヨシは大声で話し掛けたが、殆ど話は伝わらない。同居している息子、キヨシにとっては甥にあたる長男が通訳のように間に入って、何とか近況の確認ができた。長男の嫁が茶を淹れてきて、黙って二人に差し出す。その茶を飲みながら、キヨシはもっぱら長男と取り留めもない話を交わした。数年前までは元気であった長兄も、最近は肺気腫に苦しみ、酸素を吸入することが多くなったという。それでも身の回りのことは何とか自分で出来るので助かると長男が言い、その脇で嫁が頷いた。

二十分ほど話したところでキヨシは「それじゃ、また来る

よ」と言って立ち上がった。終始無言で、時折相槌だけ打っていた妻もホッとした表情で立ち上がる。そして、玄関先に停めた車に乗り込み、二人は生家を後にした。

車は来た道を少し引き返し、権現の森で右折して支道に入った。八ヶ岳の山麓、昔は山浦と呼ばれた原村やその周辺に向かう道であるが、かつては矢の口川に沿って砂利道の急坂を上った。しかし、今は入口の位置が百メートルほど北に移り、田圃の間を掘削した舗装道路に変わっている。その新設された道路は、中央本線の下を潜り抜けると急な坂に差し掛かる。キヨシは坂の手前で農道に入り、突き当りの石垣の前に車を停めた。

二人はトランクを開けて、途中で用意した生花やペットボトルを取り出した。それらを手に、夫妻は新緑の落葉松林に入って行く。所々に木漏れ日が射す黒土を踏んで林間を抜けると視界が開けて、右手の斜面に広大なリンゴ畑が広がった。そのリンゴ畑の下縁に墓に続く細道がある。人ひとりだけがやっと歩ける広さで、しかも上り口は崖のように切り立っている。キヨシは大股で急な入口をよじ登り、続いて登る妻を見守った。

リンゴ畑の一角、西向き斜面の南端に階段状の墓地が見えてきた。数十基ほどの小さな墓地で、キヨシが幼い頃は「新墓地」と呼ばれていた。恐らく、造成されてから日が浅かったのであろう。その下から三段目にキヨシの父母や先祖の墓があった。二人は細道を昇り、目指す墓碑の前に立った。妻が生花の茎に鋏を入れ、脇でキヨシが線香に火を点ける。一束の線香に満遍なく火を点けるのは大義であるが、一旦火が点くと線香は炎を立てて燃え盛る。今度は、橙色の炎を消すのに彼は躍起になった。

煙る線香を三分の一ほど手に残し、二人は墓碑の前を離れた。細道に戻り、二段ほど登って再び他家の墓前を左手に入って行く。奥から二番目の墓で立ち止まり、キヨシは手にした線香を新たな墓碑に捧げた。しかし、その墓は長兄が新たに造成したもので、キヨシにとっては縁もゆかりもないものである。ただ、墓参りに来た者の務めと割り切って、新しい墓碑に手を合わせる。

彼が大学を卒業して間もなく、父が脳卒中で急逝した。キヨシはその時、新入社員の教育を大阪の製薬会社で受けてい

た。「チチキトク」の電報で研修場から抜け出し、長距離の移動と通夜に葬儀。十日余りの欠席で後れを取った研修は自習で補い、七月の半ばに教育を修了。当時はプロパー、現在はＭＲと呼ばれる営業マンとして医療機関を訪問する仕事に就いた。教育が修了した時に知らされた赴任先は東北支店で、担当地域は秋田市とその周辺。

彼は、期待と不安とを抱きながら郷里より遥かに北にある担当地に赴く。仕事で扱う医薬品の専門知識に困ることはなかった。しかし、生まれて初めての営業には戸惑いや失敗が多くて簡単には馴染めない。さらに、月の大半は旅館暮らしで、さらに泊る部屋が日替わりで変わった。会社の先輩や同僚が多いときには大部屋、少ないときには中ぐらいの部屋、そして一人になると三畳間に通される。毎日仕事から帰ると、まず帳場で「今日の部屋は？」と受付の女性に聞く始末で、高校の時から個室で暮らしてきたキョシにとっては毎日が地獄のように辛く感じられる。

赴任から三ヶ月ほどが過ぎ、木々の葉が色づき日没も早くなった。彼は病院や診療所を訪問した後で、車の運転免許を取るために教習所通いを始めた。そのようなある晩、寒くて真っ暗な夜道を定宿に戻ると兄からの封書が届いている。その日の泊り部屋に大きな鞄を置いて、「わざわざ出先の宿にまで何事か」と封を切る。中には遺産相続の放棄を要請する手紙と書類が入っていた。さほど多くはない遺産だったので、彼は相続権の放棄に異論はなかった。しかし、長期の出張に入ったばかりで、翌月の初めまで支店に戻ることはない。印鑑証明を取り書類に押印するためには、少なくても一ヶ月は掛かってしまう。その旨を連絡しても、年長の兄や姉からは矢のような催促。仕方がなく彼は、出張先の市役所に出向いて定宿を現住所に登録して、その場で書類を作った。

重い鞄を抱えて病院や診療所を回った後の教習所通い、加えて夜も安息できない旅館暮らし。辛い毎日に耐えられず、彼は秋が深まったある夜に胃痙攣の発作に見舞われた。同室の先輩社員が、「呻き声でみんな眠れない」と近くの診療所に電話を入れて往診を依頼。鎮痛薬の注射で転げ回るほどの痛みから解放された。激痛は胃潰瘍の症候で、彼はそれからしばらく休憩の時間を増やしたり薬を服用したりして療養に努める……。いま振り返ってみると、あのときが人生の中で最も辛かった時期だったかも知れない。その苦境のさなか

で『無理強いされた相続権の放棄』という嫌な感覚が今でも彼の脳裏に焼き付いている。

その苦々しい相続放棄から幾らも経たないうちに、彼はまた嫌な思いに晒される。長兄が先祖代々の田畑や山林を売り払って、古い家を取り壊して小奇麗な住宅を新築。さらに先祖の墓まで別の場所に移転してしまった……という話が聞こえてきた。しかも、それらのことはキヨシたち弟妹には何一つ相談もなく、長兄が独断で行った、というのである。

そのような経緯があり、キヨシは長兄とその家族が住む新しい家に親しみを感じなかったし、移転した墓を素直に受け容れる気持ちにもなれなかった。

「ここはね、もとはヒデサ叔父さんのお墓だった」

焼香と合掌を済ませたキヨシが、ぽつりと妻に言った。

「ヒデサ叔父さん？」

「ウン、庭園技師でね。山口で仕事をしているときに亡くなった」

「キヨシさんは、会ったことがあるの？」

「いや、僕が幼い時に亡くなったから、覚えてはいない」

「それじゃぁ、なぜ？」

「ここは四角い芝生で、右奥に人の頭ぐらいの石が一つ置かれていた。その下にヒデサの遺骨が埋められていると聞いて育ったから」

「墓参りには必ずこちらにも来たのね？」

「そう、父を見習って、しっかりお参りをしたものさ」

「だとしたら、このお墓を造るときにね、お兄さんは叔父さんの遺族に了解をとったのかしら？」

「いや、それはないと思うな。父の死で、ヒデサ叔父さんの遺族との音信は途切れたままだから……」

そう言いながらキヨシは表情を変え、石塔の脇のプレートをキッと睨んだ。

「ちょっと待って、もしかしたら……」

彼は伸びた草を踏みつけ、墓の裏側に回る。そして方形の墓誌に刻まれた幾つかの文字を目で追った。

「あった、これだ。これがヒデサだ！」

キヨシはそう叫ぶと、後ろに立つ妻に話し掛ける。

「俗名は英賢（ひでよし）、昭和二二年十月二九日に死亡している。応信院釋実如が戒名だね」

彼はこの新しい墓所に今まで数回来たことがある。しかし、両親や祖父母が眠っていない墓に縁はないと形だけのお参りをしてきた。ところがいま、幼い時から心に掛かっていたヒデサ叔父さんも葬られていることを知り、考えが変わった。改めて墓前に戻り、短い一生を遠く離れた山口の地で閉じた不運な叔父の冥福を祈った。

これまでとは印象が変わった新しい墓碑から離れて、二人は黒土の道に戻った。足元に注意しながら斜面を下り、薄暗い落葉松の林を通り抜ける。そして、石垣沿いに停めた車に乗り込み、権現の森の脇を通って国道二十号線に出た。

「さて、これからどうする？　真っ直ぐ帰るか、それともどこかに寄るか？」

「そうねェ、せっかくの機会だから尖り石遺跡に行ってみたいわ」

「そうか、僕だけでなく君が望むところにも行きましょう」

キヨシはそう答え、昔日の面影が消えた宿場町の家並みの間を通り抜けた。左手にインターチェンジに入る信号が見えてくる。車はその交差点を左折し、八ヶ岳に向かって長い坂を上った。畑の中の道をひたすら走ると、前方に霧ヶ峰の高原が灰色に見えてきた。

「もうそろそろ着くわよ、減速して」

妻のナビゲートで、キヨシはハンドルを右に切った。そして、少し坂道を上ると尖り石遺跡の建物や駐車場に辿りつく。

妻の目的は、尖石縄文考古館であった。館内は思ったより広くて、夥しい数の土器や土偶、矢尻などが展示されている。

「これが縄文のビーナス、国宝よ」

妻の案内で、妊婦をかたどった土偶にキヨシも目をひかれた。そのすぐ脇に、やはり国宝の『仮面の女神』も展示されている。それらをゆっくり見て回った二人は、遺跡に関するビデオを視聴したが、キヨシは途中で眠ってしまった。

夕方近くに畑中の坂道を下って、高速道路に入った。隣町の富士見で中央高速の最高標高地点を過ぎると、なだらかな下り坂が延々と続く。その道が平坦になるのは甲府盆地で、行き来する車も大幅に増えてきた。市街地を大きく迂回した道路は勝沼の先からトンネルに入り、出たり入ったりを繰り返す。道幅も狭いうえに急なカーブとアップダウン。思わず

ハンドルを握る手や肩に力が入り緊張の連続。その厳しい道路も八王子の近くで平坦になり、片側三車線へと広がる。やがて車は首都高に差し掛かり、都内の屈曲した隘路を小一時間で走り抜けた。

箱崎のジャンクションから京葉道路に入り、車は千葉にある自宅に向かっていた。左手の夜空に、ひと際高くスカイツリーが見えてきた。その塔は淡い色調の緑と紫色にライトアップされている。

「あの近くに隅田公園があるよね」

「はい、スカイツリーから浅草寺に向かう言問橋の下ですね」

「その隅田公園はね、さっき墓参りをしたヒデサ叔父さんが設計したらしい」

「フーン、それは確かなことなの？」

「いや、確かな証拠は何もない。ただ父が死ぬ少し前に、『弟の英賢が設計した公園に行ってみたい』と言って、都内に住む姉に案内をさせたというだけ」

「それ以外には、何も？」

「ウム、いろいろ調べてはみたんだが……。なにせ関東大震災で、東京が焼け野原になった直後のことだからねぇ……」

沈んだ声で話すうちにスカイツリーも視界から消え去った。どこまでも続く町明かりの中を、彼は黙ってハンドルを握り続ける。

〈以下、次号〉

信忠

畑中康郎

予は弘治三年（一五五七）、織田信長の嫡男として尾張に生まれた。あの六天大魔王、後に天下人となる男である。母親は配下の武将、生駒八右衛門の妹吉乃（きつの）。

吉乃は美濃可児郡の土豪、土田弥平次の妻であったが、弥平次が戦死して実家に戻っていた。それを父が見初めて側室にしたわけだ。母は数多い側室の中で最も父から愛された女性だったらしい。何事も受け容れることのできる包容力と同時に智恵にも優れていたから父の政治面軍事面の相談相手にもなっていたようだ。しかし相談相手とはいっても、専ら聞き手に回っていたらしいが。ともかくも、父のようなどれほど強い人間であっても心に鎧を着ることなく裸になれる相手はやはり必要ということだろう。

この両親の間に予と次男の信雄（のぶかつ）が生まれた。生まれた順番が予の方が一年早かったので嫡男なのだが、このことが予には大変な重圧となった。

予の生まれた時代、それは殺戮が日常化している、とんでもない時代だった。幼少時から聞かされた話は誰が何某を斬ったとか、何某が首を何個取ったとか、かの地では一時

に何百人が殺されたとか、そんな血生臭い話ばかりだった。他人に対する優しさだとか思いやりなんてものは話題にもならない。そんなことを話せば、すぐ軟弱な男と見做され蔑まれるだけだった。

帝王学は幼少時から学ばされた。だが予にとって帝王学などどうでもよかった。少しも楽しくなかった。それでも自慢ではないが、学ぶ力はかなりあったように思う。遠く中国の秦、漢、唐など大帝国の成立経緯や「孫子」や「呉子」など多くの兵法書も学ばされた。さらには、わが貴族社会との付き合い方や天朝のしきたりまでも学ばされた。それでも予はそれによく耐え、習得に励むことができた。周囲の期待に子供ながらに応えようとしていたのだ。

わが幼少時に不足するものは何もなかった。周囲は予に気の毒なくらいに気を遣い、必然、予はわがままに育った。周囲の者は予が判断力のない幼児にも拘わらず、予の命ずるがままに動き、腫れ物に触れるように接した。今にして思うことは、予の機嫌を損じ、また怪我でもさせたら間違いなく父から処罰される。それを怖れたのだろう。

幼少期は楽しいことばかりで、何を命じても我が意のままだった。だが、後に忽然と気づき自戒したことは、そのまま育てば、予は間違いなく世間で使い物にならない、わがまま放題の人間になるということだった。すぐに自分が天才信長の嫡男として生まれた意味を自覚した。

天に駆け上る龍の如く、各地の武将を斬り従えている信長の嫡男としての立場がどれほど厳しいものか、長ずるに従って理解した。そして多分、予のわがままを押しとどめたのは帝王学で学んだ、名君たる者の資質とは何かを知ったからに相違なかった。予は、我慢することを学んだ。

父・織田信長が成し遂げたいくつもの勝利、例えば織田同族間の尾張統一戦を制したこと、桶狭間で乾坤一擲の勝負を仕掛けて今川義元に勝利したこと、さらには美濃攻略戦で斎藤義龍を撃破したこと。同時に伊勢平定戦、また上洛戦での六角、三好勢の攻略。叡山焼き打ち、さらに対朝倉・浅井では姉川の戦いで大勝利を収めたこと。そして同じ時期に本願寺攻めを決行し多数の死者を出しながら、これを武装解除に追い込んだこと。如何に信長という男が戦国武将の中でも傑出した存在であったことか、予は嫌でもわか

った。

一方で、この偉大な信長という男が自分の父親であるという事実が予にとって、あまりに重いものであることに気づいた。はっきりいって、慄然としたのだ。生まれながらにして求められる、武将としての大きな器量。しかもその器量は、信長という天才と同等か、それに近いものでなければならぬ。だが、それがどれほど困難なことか。なにしろ、父は何百年にひとりという天才だった。

予にとって最も恐ろしかったことは、父が遺す覇権を継ぐ宿命にあったことだ。予は嫡男なのだ。嫡男である自分が織田家を継ぎ、切り取った領土を死守して行かねばならぬ。それを考えた時、果たして、自分にそれだけの器量があるのか疑問に思えたし、精神的重圧になった。

父の周囲を見回すと、有力な武将が多く存在した。明智光秀、羽柴秀吉、柴田勝家、滝川一益、丹羽長秀等々だ。それに同盟者としての徳川家康。それらの面々は天下に押し出していく能力が十二分にあった。そんな彼らが、もしも信長という存在が消えたとき、果たして予に心服するだろうか？　いやとても無理だ。少なくとも今の予にそんな力はない。

柴田や丹羽は父と昔からずっと行動を共にしてきたから、予を裏切ることは多分ないだろう。しかし問題は、明智、羽柴、滝川だ。彼らは父の勢力が拡大するにつれて織田軍に合流してきた者たちだ。つまりの父の実力に魅了されてついてきた連中なのだ。父の存在があって初めて織田の配下にある。父の存在がなくなればどこまで信用していいのかわかったものではない。

まず、明智だ。彼ははじめ朝倉義景の家臣だったが、義景を頭領に戴くには物足りないと見限って織田軍についた。羽柴もそうだ。彼も今川の家臣、松下之綱に仕えていたが、京の雅に染まり、身分格式を重視するだけの男だったから時流に合わないとして見限った。明智も羽柴も人を見抜く力は一流だった。滝川にしても元忍者の頭領だった男で、父・信長がその力量を見抜いて武将に取り立てた。

だから彼ら三人は、父だからこそ臣従している男たちなのだ。彼らの武将としての実力は頭抜けており、自立して天下を治められる器量人ばかりだ。その武将たちが陰に陽に

予を盛り立て、予に注ぐ敬意の眼差しは父がいるからこそあり得ることだ。いわんや徳川にいたっては同盟者にすぎない。隙さえあればいつでも織田潰しに名乗りを上げるに違いない。

予は焦った。焦らないで済ませられるものではなかった。時は刻一刻、決して立ち止まることなく過ぎ去って行く。早く武功を立て、実力を備え、周囲の評価を勝ち取らねばならない。将来の織田家の頭領としての力を身に付け、彼らが一目を置く存在になっていなければならない。そうでなければ、彼らは臣従しないだろう。予はますます焦燥にかられた。

そんな状態だった予に、やっと武功を挙げられる、と思えた戦いがあった。それが、元亀三年（一五七三）の浅井長政を小谷城に攻める戦いだ。浅井は父の妹・お市の方が嫁した家だ。ところが元亀元年、父が朝倉義景を越前谷に攻めたとき、長政は父を裏切った。京文化に染まり、時流を見通すことができなかった義景に与して、父を討とうとしたのだ。裏切った理由が馬鹿げている。時流に乗った人物より、昔からの古い付き合いを重視したのだ。

そのときの父の怒りは凄まじかった。長政を信じていただけに、挟み撃ちという窮地に陥り、父自身が九死に一生を得て、京にやっと生還した。そんな厳しい戦いだった。それにしても、父はよく生き残ってくれた。有難いことだった。

それから二か月後、父は、姉川の戦いで浅井・朝倉連合軍を破り、そして三年後の小谷城攻めで浅井を滅ぼしたのだが、殺した長政の髑髏で翌年正月の祝賀酒を呑んだ。それだけ、父の恨みは深かったのだろう。

浅井が滅んだ、その小谷攻めのとき、予は十六歳で出陣した。気負ったものの、このときは顔見世のようなもので、父の目的は、予に戦場を実見させたかっただけだ。

天正二年（一五七四）には、十七歳で長島の一向一揆に参陣した。このときは白兵戦になった。予自身にも危ない場面があり、ひとつ間違えれば、命を落とすようなきわどい戦いだった。織田軍は大量殺戮の末に一揆の鎮圧に成功したが、結局、そのときも予に手柄はなかった。

これらの戦いは、いずれも父が背後にいたからこそ勝てたにすぎない。織田の勝利にも拘わらず、予には焦燥感だけ

が残った。早く自分の力だけで敵を倒したい。早く手柄を挙げたい。頭の中はこのことでいっぱいだった。

天正三年（一五七五）、十八歳で参陣した長篠の戦いでは戦争のやり方が大きく変わった。鉄砲を何段にも構え、柵の中から撃ち手を変えて武田軍を銃撃した。かつてない斬新な戦法であった。面白いように敵が斃れた。だが、このときも予に特別の手柄はなかった。戦法は全て父・信長の創意である。確かに、予はどの戦でも理に適った動きを取った。しかし、それらの戦いは全て父の指揮の下であったし、周囲に予を補佐する優れた武将がいたから、卒なく勝利を挙げられただけのことである。何ひとつ予の力で成し遂げた勝利はなかった。

そんな中、翌年の天正四年、突如、父が「織田家の家督を嫡男・信忠に譲る」と天下に公言した。

心底驚いた。実は、そのとき、ぞっとした。その瞬間の予の極端な緊張状態は言葉にならない。いや緊張というよりも恐怖といった方が妥当かもしれぬ。

そして予に素朴な疑問が生じた。織田家の武将たち、その並外れた智謀・胆力そのうえ歴戦の圧倒的経験を誇る連中は腹の底で何と思っているか？　第一、予の力で織田家を宰領できると思っているか？　という疑問だ。

今の予にそんな力があろうはずがなかった。何度も繰り返すようだが、父が生きているうちはまだいい。もし父がいなくなったら、一体どういうことになるのか？　予はたちまち不安にかられた。重圧が予の両肩にのしかかった。若輩の身で何ができる？　予はまだ十九歳だった。

父はそのとき四十二歳。四十二歳といえば、祖父・信秀が死去した年齢である。つまり後顧の憂いのないように早く一族の地盤を固めたかったのだろう。

予にとっては、ますます時間との戦いになった。一刻も早く武将としての実力をつけねばならない。父が生きているうちに、何としても名実ともに織田家の当主に相応しい男にならねばならぬ。自分という男に手向かう気力さえも失わせるくらいに実力を身につけ、威厳をもって家臣たちに君臨しなければならぬ。しかも一刻も早く。

ところが、如何に頭で考えても威厳が生まれるはずもなかった。威厳は実戦の結果、生じるものだ。実戦での勝利を積み重ねることによってのみ、父のような確固たる威厳

が備わる。それには戦いだ。それしかない。数多くの戦いを通じて実績を上げ、家臣たちの信頼を勝ち得たうえで、初めて父に優るとも劣らぬ武将になれる。予にとって、それからの日々は、さらに重苦しいものになった。

そのころ、天下統一までの障害となっていた東方の敵といえば、北陸の上杉、関東の北条、中でも、年来最大の敵は信州の武田四郎勝頼であった。早く勝頼を斃し、東方の憂いを除かねばならない。勝頼だけは予自身の手で始末しなければならぬ。

好機は天正十年（一五八二）二月にやってきた。父から武田攻めの総大将を命じられたのだ。予は躍り上がってよろこんだ。武田を撃破すれば、父に近づける。

まず戦いは、信州・高遠城を落とすことから始まった。高遠城には信玄の五男、猛将・仁科盛信が兵三千で立て籠っていた。これに対し、自軍は十倍の三万。当初、押し潰すことはいとも容易いと高を括った。

ところが、戦い始めてそうではないことがすぐにわかった。仁科も歴戦の勇士だった。一歩も引かない。それどころか、城の周囲は深い堀になっており、堀の淵には土塀が張り巡らされていたから、予の軍が堀をやっとの思いでよじ登り、土塀に近づくと、その上から弓矢や鉄砲の弾が飛んできた。何度も試みたが、その度に失敗した。ついには、味方の兵士千人が犠牲になって堀の底に死体の山を築いてしまった。

この失敗は父の耳にも入っているに違いなかった。顔に青筋を立てて、怒っている様子が目に見える。予はまたしても焦った。自分は叱責され、武田攻め総大将の地位を失うかもしれぬ。

ついに決心した。何もかも失う覚悟を固めたのだ。全軍を奮い立たせるには、大将の自分が先頭に立って、あの土塀を超え、城の石垣に取り付かねばならない。予は、突然、走った。死に物狂いで土塀を超えた。それを見た全軍の兵士たちが激しく奮い立った。大将を死なせるわけにはいかないと考えたのだろう。もしも予が戦死でもしたなら、兵士たちに腰抜けの汚名が着せられ、生き恥を晒し、ついには父からどんな懲罰を受けるか知れたものではない。彼らは命知らずの勇猛な軍隊に変貌した。士気は否応なく膨れ

上がり、あっという間に多くの兵士たちが石垣に取りつき上り始めた。こうなると仁科軍にとっては、もともと多勢に無勢。結局、あまり時を移さずに高遠城を落とすことができた。

城は落ちたが、よく考えてみると予の取った行動は大将として納得のできるものであったかどうか。恐らく間違っている。成功したからよかったものの、もしも失敗していたら一軍の総大将が一兵卒同様に一本の矢、一発の弾で死ぬところだった。そうなっては軽率の謗りは免れない。そんなことが帝王学を学んだ予にわからぬはずがなかった。

土塀を乗り越えるべく単独行動を起こしたとき、予は死を覚悟した。全てを失っても構わないと思った。父の叱責を食い、総大将を外されるくらいなら死んだ方がましだった。わずか三千が立て籠もる城にいつまで手こずっているのか、怒る父・信長と蔑む武将たちの目。それが一見無謀に見える行動になったのだ。

仁科攻めの勝利を祝す宴の席でのことであった。そこに父からの書状が届いた。てっきり手柄を褒める内容を期待した予であったが、その文面は意外なものだった。本隊の勝頼を攻めることは暫く待てというのだ。父が大軍を率いて合流するから、それからにせよ、という内容だった。予は歯噛みするほど悔しかった。自覚したことは今の自分に対する、父の信頼の薄さだった。

予は奮い立った。こうなったら、父の命令を無視するしかない、と決断した。這い上がる絶好の機会でもあった。命令に背けば仮に成功しても厳しい処分が待っている。それでもいい、と思った。

今の武将たちで勝手に軍を動かした者はいない。彼らは、軍令に背いた小者の末路を実際に見聞して知っている。だが、予は待てなかった。早く父を超えねばならない。予は全軍を信長軍の到着前に動かした。

戦いとは予測不能なものだ。この行動が結果的に勝頼を自害させる天目山の戦いへとつながったのだから、わからない。予は勝頼を追い詰め、ついに予の力で勝利をもぎ取った。ついに訪れた歓喜の瞬間だった。

予の戦勝後に到着した父は、満更ではない様子だった。予という嫡男の予想以上の勝利に気をよくしたのであろう。

これで織田家はまたひとつ磐石に近づいた、と父は周囲に漏らした。そのことが予の耳に入り、やっと面目を施した。

そして驚いたのは、父が武田の遺領の全てを予に褒賞として与えてくれたことだ。これにより、明智や羽柴などと同様、予は自分が期待する以上の大大名になってしまった。

これが原因なのかどうか、よくわからない。父と織田家の武将たちとの間に微妙な軋轢が徐々に生じ始めたことは否めない。予を始め、信雄、信孝に対する、父の思い入れが強くなったように彼らが思い始めたのではないか。予にはどうしてもそのように思える。

三男の信孝には、四国の長宗我部の掃討戦を命じており、これに勝てば四国を所領として与えると公言した。長年、父を支えてきた武将たちより、予や弟たちを優遇し始めたのだ。一方で明智には、その所領である近江・丹波を召し上げると表明した。代わりに毛利から出雲と石見を奪い取り、それを所領として与えるというのだ。

ところが、毛利が支配する中国攻略は容易ではなく、何年もかかる壮大な戦いになる。その間、所領のない明智は家臣をどうやって養うのか？　父は、明智を追い込んだ印象を他に与えた。

佐久間信盛・父子を高野山に追放したことも予から見れば奇妙なことだった。佐久間こそ譜代の臣だ。それを冷遇したのだ。天下統一を目の前にしたからこそ、中国前漢の故事にある、「狡兎死して走狗煮らる」と勘繰られても仕方のないものだった。

武田滅亡からわずか三ヶ月後のことだった。

天正十年（一五八二）六月、驚天動地の出来事が勃発した。本能寺の変だ。

予はこのとき父に従って京の妙覚寺にいた。運命の悪戯か、織田政権の中心人物、父と予の二人がわずかな手勢で本能寺と近傍の妙覚寺にいたことになる。敵方にとっては、これほど都合のいい瞬間はなかったはずだ。配下の武将たちは各地で戦っており、とても京には戻れない。我々の周囲は全くの無防備だった。それが通常では考えられない父の油断であったろう。

本能寺にいる父が急襲されていると知らせてきたのは、

京奉行の村井貞勝だった。そのとき、彼からの一報を受けて、一番に知りたかったことは、敵は誰なのかということだ。それが明智と知って驚愕した。これで父の命運も尽きたと思わざるを得なかった。

父にはまだ死んでほしくない。今死んだら、予は絶体絶命の窮地に陥る。だが、明智が行動を起こした以上、父を討ち漏らすはずがない。織田の武将の中で、明智と羽柴の智謀・戦略に比肩しうる者はいない。全国の名だたる武将と比べても出色だ。それほどの男が兵を挙げたのだ。予は絶望した。

ところが、不思議に思ったこともある。予のいる妙覚寺には明智軍がまだ殺到していないことだった。あの明智にしては珍しい。もしも、軍が到着する前に予が逃亡を図ったらどうするつもりだったのだろう。予は父の能力に全く及ばないものの、それでも織田家の頭領なのだ。

このことから推理すると、明智は直前まで父を襲うつもりがなく、反旗は突発的に思いついたことではなかったか？　父を守る兵がわずか百人の手勢だったことに気づいたからこそ、突然、挙兵したのではなかったか？　そうでなければ、あの緻密な作戦を立てる明智が、父と予を同時に討つ作戦を立てないはずがない。

村井貞勝はそのとき、守るに堅固な二条城に移ることを予に助言した。だが、それは今にして思えば、全くの誤算だ。圧倒的多数の敵に対し、味方がたったの五百で対峙すれば、如何に堅固な城でも勝ち抜くことは難しい。

だからもしも、このとき予が二条城に行かず、生き延びること、すなわち逃げることを選択したなら、後の世はどう変わっていただろうか？　おそらく織田政権はもっと長く存続したに違いない。何故なら、織田の頭領は予であることが内外に知られており、後に権謀術策を用いて豊臣政権を強引に成立させた羽柴秀吉でさえ、迂闊に織田打倒の戦いを始めるわけにはいかなかったからだ。そんな動きを取れば、明智同様に反逆と見做されるだろう。

予が、四国に渡るために一万の兵で大坂に待機していた、異母弟の信孝と丹羽長秀の連合軍に逃げ込めば士気は上がり、さらに兵は集まって、十分に明智軍と戦うことはできたはずだ。

ところが、予は死ぬことを選択した。父・信長と予の決

定的な違いはここにも表れている。父なら万にひとつでも生存の可能性があれば、それに賭ける。まずは逃げて体勢の立て直しに取り掛かったであろう。

予には十分に逃げる余裕があった。現に叔父の織田有楽斎は逃げているし、予の嫡男・三法師は有楽斎が抱えて逃げた。だから、予にも生き延びて、後日、明智と戦う機会を持つことはできたのだ。

何故、予は逃げなかったのか？　予の力では織田の家を存続させることができないという諦めが先に浮かんだからだ。これまで重圧に耐えに耐えてきた予は、父亡き後、自分が中心になって織田の家を守ることなど、決してできないことを残念ながら知っていた。

だから、死ねことで武士の面目が立つ方を選んだ。生きれば後世に恥をさらすことになり、無能な武将として蔑まれる。予は名を惜しんだ。第一、生き残った後の熾烈な戦いを考えれば、はるかに死ぬ方が楽だった。

二条城に戦いの場を移したとき、そこを死に場所と定めた。案の定、戦いは始めから不利のままに推移し、瞬く間に明智軍に敗れてしまった。

切腹に際して、介錯人には腕の立つ鎌田新介を指名した。鎌田なら見事に予の首を打ち落とすだろう。苦しむこともあるまい。

予は二十五歳だった。死があまりに突然だったから、辞世を遺す余裕もなかった。それでは余裕があったなら、予はどんな辞世を遺しただろうか？　表面上は無念を装ったであろうが、心の奥底では安堵している、そんな辞世であったろう。

そして、死後、予の魂ははっきりと目撃した。介錯した鎌田が二条城から生きて脱出したのだ。だから、もしも予が最後まで生きることに執着したなら、脱出も可能だった。

だから多少の悔いは残る。が、本心では安堵している。

予は領地で波風を立てなかった。領民に穏当な態度で接し、決して無理な年貢取り立てを行わなかった。常に領民のことを思って統治を行った。

家臣たちに対しても、幼少時に学んだ将たる器に相応しい態度で臨んだ。だから慕われた。常に資質を磨き、忍耐して努力を重ねることを怠らなかった。

だが、正直なことをいえば、帝王学など学びたくもなかった。もともと予は、帝王学に相応しい人間ではない。

若いころ、さしたる苦労もなかったから、猜疑心も育っていない。父・信長は尾張を統一するまで、実の母親のみならず叔父、従兄弟、異母兄、実弟に至るまで信用できる人間は誰ひとりとしていなかった。父の猜疑心は膨らみ、逆にそれがあったからこそ生き残ることが出来た。予の場合、周囲が父の下に強固にまとめられていたから、猜疑心を持つ必要もなかった。肌に粟立つ恐怖や緊張を強いられる戦国時代を勝ち抜くには、如何に人の心を見抜き、人を騙し、利用できるかにかかっている。

しかし予にとって、そんなことはどうでもよかったし、予にはできないことだった。戦争に勝つことより他人との和を保てる、そんなふつうの生活。予はふつうの両親の下に生まれたかった。

（了）

【編集後記】

■紫陽花が見ごろを迎えたが、文芸「草の丘」十二号を予定通りに発行する運びとなった。今回は詩とエッセイ、短編に連載小説の構成で、合わせて六作品が集まった。

中川とらは短い詩を二編発表しているが、透明で張り詰めた作者独自の世界を醸し出している。

唐瀬 光の「ラン博士の館」は第三話になるが、情景描写が巧みで、ストーリーの前後が分からなくても面白く読める。なかでも、幽霊が出るという西洋館を、少女たちがカシの木に登って見張る場面は臨場感にあふれ、思わず物語の中に引きこまれる。

中川とらの「そよのバアバの空中サロン」も連載三回目になるが、今回登場する「静子」の描き方は秀逸。短い文章の中に、夫と心が通わない妻の悲哀を封じ込め、リアリティのある作に仕上げた。

畑中康郎の「信忠」は、織田信長の嫡男の心中に入り込み、信忠の独白の形で本心を語らせる。乱世を生きた信忠の波乱に満ちた生涯を手際よくまとめてあり、一気に読み終える。しかし、余りにも多くの出来事を詰め込んだため、粗筋的になったきらいは否めない。

香取 淳の「宿場町と共に消ゆ」は、故郷の宿場町とそこに生まれ果敢に生きた人たちの物語を幼少期の記憶から書き起こした。終わりまで書き上げないと評価に値しないが、原稿の締め切りに間に合わず、不本意ながら前半だけを掲載した。

■本会では、意欲的な新人を募集している。小説に限らず、詩や随筆、評論、さらに短歌等を創っている方は是非、左記までご連絡を！

〈香取 記〉

【会員と連絡先】

いんば 華子　bulldog_dolla_mon@hotmail.com

唐瀬　光　effect_fact_mouth_karase_4118@yahoo.co.jp

中川　とら　nakagawatora1@gmail.com

畑中　康郎　ktakasug@am.em-net.ne.jp

香取　淳　katorijun27@gmail.com

高橋より（イラスト）

junko328p@softbank.ne.jp

草の丘　第十一号

発行　二〇一七年六月二五日

編集兼発行人　印旛文学の会　香取　淳

連絡先メール　katorijun27@gmail.com

ＵＲＬ http://bungeikusano-oka.raindrop.jp